

# 清末小説から 144

2022.1.1

呉禱漢訳『寒牡丹』——尾崎紅葉『寒牡丹』……………樽本照雄 1

呉禱漢訳『美人煙草』——広津柳浪『美人苺』……………荒井由美19

关于吴枋译《傲虚党真相》的底本及其他……………梁 艳29

林訳『俄宮秘史』の原作・補記……………沢本郁馬36

陳景韓漢訳コレリ『新蝶夢』の奇怪——黒岩香訳『白髮鬼』……………神田一三43

清末小説から28、42、54

★本年もよろしくお願ひいたします。予告です。『清末民初小説目録第14版』は本年の早くに公開します。『清末小説から』第145号は3月末に公表を予定します。まだまだ続くでしょう罍

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

呉 禱 漢 訳『寒 牡 丹』  
——尾崎紅葉『寒牡丹』

樽 本 照 雄



架 蔵

## 1 紅葉『寒牡丹』

本稿で取り上げる呉禱漢訳『寒牡丹』の底本は次のとおり。

尾崎徳太郎、長田忠一著『寒牡丹』（春陽堂 1901.2.6。初出『読売新聞』は未見）は本文に秋濤居士、紅葉山人を著者とする。

著書のどこにも翻訳だとは明記されていない。しかし原作があることは知られている。その原作については不明のまま。

山田有策ほか編『尾崎紅葉事典』（2020）\*1 には次のように説明する（渡辺麻実執筆）。

「原作は未詳」（35頁）。該作品の問題点を

あげて「それらを評価する上でも、原作の特定、翻案・改作箇所の検討が課題となる」(36頁)という。

原作が不明だと紅葉が手を加えたか改変したかが確定できないという意味だ。紅葉は『侠黒兎』において結末を書き換えたことがある。ケガですんだ主人公の黒人を死なせた\*2。

紅葉と並記されている長田秋濤が原作あるいは翻訳を提供したのだろうか。詳細は不明。「秋濤訳、紅葉校」と記述する「近代書誌・近代画像データベース」もある。本稿では共訳としておく。

秋濤については秋山勇造「長田秋濤」(1998)\*3に詳しい。それによると秋濤は幼時よりフランス語を学び留学をしている。またイギリスのケンブリッジ大学でも学んだ。フランス語と英語に堪能だという。秋山は秋濤翻訳の2大特徴を次のように説明する。「一つは翻訳の文体がほとんどすべて言文一致体であったこと、もう一つは彼の翻訳がすべてフランス語からの翻訳であったことである」174頁

秋山論文は酒井美紀『尾崎紅葉と翻案』(2010)\*4に影響を与えたかもしれない。酒井は『寒牡丹』に言及して次のとおり(アラビア数字を使用する)。

「『寒牡丹』(長田秋濤と共訳)／明治33年1月1日～5月10日／『読売新聞』全95回。原作・原作者未詳フランス小説か」(33頁)

酒井が「フランス小説か」と推測した根拠は秋山論文ではなからうか。秋濤がフランス語を使用して翻訳したという知識があるからだろう。違っていたら申し訳ない。

現在のところ外国作品を秋濤と紅葉が共訳したということしかわからない(略称は紅葉訳)。

紅葉訳に使われる単語にひとつの傾向がある。添えられたルビ(カッコに入れる)などの例を示す。

### カタカナ表記の傾向

紅葉	英語	フランス語
聖彼得堡(セントピイタスブルグ)	Saint Petersburg	Saint-Petersbourg サンペテルブールグ
チャーチ	church	église
友誼(フレンドシップ)	friendship	l'amitié
卓子(テーブル)	table	table タブレ
窓帷(カーテン)	curtain	rideau
檻車(キビトカ)	culprit car	voiture coupable
庖人(コック)	cook	cuisiner
新聞(ニュース)	news	nouvelles
シオウル	shawl	châle
ランプ	lamp	lampe ラン
リウマチズム	rheumatism	rhumatisme ルーマチ
ピストル	pistol	pistolet ピストレ

カタカナ表記の使い方を見れば英語だ。秋濤がフランス語から翻訳し英語読みのルビを振った。あるいは紅葉が校閲して英語風に変更したか。どちらの可能性もある。原作が不明だから事実はわからない。秋濤がフランス語からしか翻訳しなかったというなら矛盾している。ロシアの地名が出てくるのは事実だ。しかし詳細に描写されるわけではない。秋濤が資料提供して紅葉が創作する。その可能性はまったくないのだろうか。手がかりがないから判断に迷う。

また田中彌十郎が秋濤著作には他人による下訳が多いことを指摘している。「秋濤の著作に代訳或は下訳が多いことは昨年の本誌(注:書物展望)にも一寸述べたが、最近直接その事に當った彼の門下生伊藤重次郎氏にお会いして詳細を聞くことを得た。彼の下請文章家としては二六新報記者だつた故鍋田永村氏があり、この人は漢文調の名作家であつた。伊藤氏はこの鍋田氏よりはやゝ遅れて秋濤の下訳を仰付けられたらしい」(15頁)\*5

そうであれば原作の探索は一層の困難がともなうだろう。

本稿ではとりあえず原作不明のままにして記

述する。

紅葉が原作について表現などに独自の手を入れたことはありうる。ただし(原作があるとして)物語の大筋は守っているだろう。小説全体の構成を見ると破綻した個所がない。基本の設定は原作のままだという印象を筆者は感じる。原作が見つければその時に考え直す。

ということで紅葉翻訳とそれを底本にした呉構漢訳を比較対照して検討する。

## 2 呉構漢訳

(日)尾崎紅葉著、錢塘呉構訳『(哀情小説)寒牡丹』は商務印書館「説部叢書」に収録された。

2種類ある。ひとつは元版でもうひとつは後刷りの初集本だ。ふたつを簡単に示す。



元版

初集本

1 元版 上下巻：上海・中国商務印書館  
光緒三十二(1906)年三月首版 説部叢書第四集第十編(孔夫子旧書網)

2 初集本 上下巻：上海・商務印書館  
丙午(1906)年三月初版/中華民國二(1913)年十二月三版 説部叢書初集第41編

本稿では2の初集本を使用する。

呉構漢訳は紅葉日訳本に記載される長田忠一

(秋濤居士)を省略した。漢訳の表記から原作者は尾崎紅葉ということになる。日本人の紅葉がロシアを舞台にした恋愛小説を書いた。呉構はそう理解していただろう。

『寒牡丹』という題名から寒冷地の女性を主人公にしていることはわかる。最後に主人公が高貴、富貴の寒牡丹になることを暗示するのかもしれない。しかしその印象は作品の冒頭を読むことによって打ち砕かれる。

もともと大衆恋愛小説である。性的暴行を受けた被害者(庶民階級)が加害者(貴族階級)に恋愛感情を抱きそれが成就する。始まりがはじまりだからいわゆる衝撃小説だ。その結末を指して紅葉は寒牡丹だといいたいらしい。

原作の題名は『寒牡丹』ではないだろう。英語で cold peony フランス語の pivoine froide では書名にはなりにくいと思像する。原作は内容から見ても具体的な別の題名があるはずだ。

それを日本語に翻訳する際、すこしひねって『寒牡丹』という日本風の題名にしたと思う。

両本の章題(回目)を抜き出して対照する(ルビ省略。以下同じ)。紅葉本は1冊。呉構漢訳は2冊で彼は回目を2文字にまとめた。紅葉訳の内容をほぼ要約して簡潔に表現している。両者の各章対照表を見れば完全に一致しているわけではないことがわかる。巻下では日訳を分割して漢訳した箇所もある。しかし内容は基本的に同一だ。

### 巻上

- |            |                 |
|------------|-----------------|
| 1 雪中の狼藉    | 第1回 遇奸(悪漢に遇う)   |
| 2 不幸の盃     | 第2回 喪母(母を亡くする)  |
| 3 背の冷汗     | 第3回 行私(私心)      |
| 4 掌上の人形    | 第4回 悔罪(罪を悔いる)   |
| 5 一万五クルウブル | 第5回 拒金(金を拒否する)  |
| 6 老の歎願     | 第6回 謁邸(屋敷に参上する) |
| 7 門前の一瞥    | 第7回 覩讎(仇を見る)    |
| 8 驚天動地     | 第8回 索犯(犯人捜し)    |

9	結婚の刑	第9回 婚刑(結婚の刑)
10	財産目録	第10回 濁富(汚れた富)
11	文中の秘密	第11回 発簡(手紙を見つける)
12	勤儉貞淑	第12回 苙郷(田舎へ来る) 日訳215-223頁を第13回へ移動
卷 下		
13	恐怖と寒さと	第13回 乞命(命を助けて) 第14回 拯孤(孤立から救う)
14	村の記録	第15回 得書(書信を得る) 第16回 述案(事件を語る)
15	兇険の相	第17回 索御(御者を探す)
16	窮命の淵	〃 第18回 誘供(自供を誘う)
17	減水の量	〃 第19回 村関(村の騒ぎ)
18	御神の審判	〃 第20回 案発(事件が暴かれる)
19	令聞噴々	〃
20	賢婦忠僕	〃 第21回 赴配(流刑地へ赴く)
21	特赦の天使	〃 第22回 遇恩(恩赦になる) 第23回 返環(指輪を返す)
22	燈下の指環	〃 第24回 圓鏡(元の鞘へもどる)
23	配所の雪	〃
大団円	花の都路	〃

漢訳作品を検討する前に清末同時代人の発言を見ておく。

覚我(徐念慈)「余之小説観」(1908)<sup>\*6</sup>だ。該文で同じものを別々に漢訳してそれぞれに題名をつけていることを言う。その例のひとつとして『寒牡丹』をあげた。すなわち「寒牡丹之即彼得警長」である。『寒牡丹』が『彼得警長』と同一作品だと発言したのだった。

しかしこれが間違いであることは中村忠行

「晩清に於ける虚無党小説」(1973)<sup>\*7</sup>が指摘している。

『徐兆璋雜著七種』(2014)<sup>\*8</sup>に記録がある。次のとおり。

寒牡丹二卷 商務印書館本 光緒三十二年三月出版/日本尾崎紅葉著, 錢塘吳構訳。/記俄国聖彼得堡栢列基伯爵夫人事。407-408頁

栢列基は誤植で柯列基が正しい。書名を掲げて内容が「セントピイタスブルグのクレキ伯爵夫人の事を記す」というだけ。細部には立ち入っていない。

寅半生「小説閑評」(刊年不記)<sup>\*9</sup>は『寒牡丹』を取り上げてかなり詳しく紹介している。珍しい。文章の前半で粗筋を述べ後半が寅半生の感想だ。本稿において対応する部分に【寅半生】と記してそのつど引用紹介する。

版元の商務印書館が書目提要を発表している。付建舟『晩清民書局發行書目』(2016)<sup>\*10</sup>に収録された『商務印書館書目提要』(1909.九改定7版、説部叢書、哀情小説、提要、装成一木箱)から引用。本文が粗筋の紹介になっている。その部分のみを翻訳する。

言情小説 寒牡丹 二冊 四角五分/俄国仕官出遊, 見良家女子劫而汚之, 女訟得直, 俄皇判某取女為妻, 情事淒麗, 可興可觀。201頁

ロシアの仕官が遊びに出かけ良家の女性を略奪して汚辱する。女性がただちに訴えるとロシア皇帝は某にその女性を娶るよう判定した。内容は淒絶にしておもしろく読み応えがある。

性的暴行の被害者が加害者と結婚させられる。商務印書館による要約はそこを前面に押し出した。該小説の中心だと主張しているのだ。

あらためて粗筋を述べながら紅葉日記と呉禱漢訳を比較対照する。固有名詞の後ろに「/」を使用し漢訳を示すことがある。

### 3 「紅茶屋」から始まる

冬のロシア聖彼得堡(セントピイタスブルグ)で物語がはじまる。有名な料理屋「紅茶屋(べにぢやや)」が客でにぎわっている。おりからの寒気の中で客たちはさすがに引き上げてしまった。その部分を紅葉は一気に描出する。どのような文章か見てみよう。あわせて呉禱漢訳も示す(下線筆者。頁数の「上」は巻上を示す)。

【紅葉】扱此夜の寒気は格別で、然云ふ晩には例のトロイカを飛して飲みに来る紳士が多い、座敷は皆塞つて、燈影衣香の間に笑語の声は湧くが如く、興酣に、楽を極めざる處も無かつたが、十時過より寒威の俄に募つた為各宴を撤して、十二時頃には客は大方起つて了つた。5頁

【呉禱】且説這一晩的寒気。格外来得兇。凡遇冷天。那些乘坐忒雷架前来飲酒的紳士。越見得比常加多。座滿盃空。擁擠得没有挿足之地。只覺燈紅酒綠衣香鬢影之間。笑語喧譁声音。和雷霆波濤般洶湧。真是人間天上。長樂未央。直過了十點鐘。纔大家一齊撤宴。到得十二點將近。纔漸漸一起一起走了出去。上3-4頁

呉禱漢訳は口語(白話)によるほとんど直訳になっている。紅葉訳よりも少し詳しくした下線部分もある。

「座敷は皆塞つて」を「座滿盃空。擁擠得没有挿足之地(座席は満ち盃は空に、混みあって足を差し入れる余地もない)」とした。紅葉訳に「燈影衣香の間」とあるのを「燈紅酒綠衣香鬢影之間」と書かずにはいられない。「燈紅酒

綠」はきらびやかな灯りと美酒を「衣香鬢影」は美女を形容している。

呉禱による加筆して紙幅を取っている個所がある。後に蕾又親子がロシア皇帝に拝謁する場面だ。実例として参考までに注に引用しておく\*11。

「紅茶屋」に来る男性は紳士だが女性は娼妓のみである。そういう種類の料理屋だ。この説明が事件の背景を説明している。

紅葉訳は「紅茶屋事件」という。詳しくいえば「紅茶屋婦女暴行事件」と称するのがふさわしい。ロシア近衛士官3名による女性凌辱事件である。

蕾又幌尾(らいさほろお/麗查 霍洛華)18歳(後19歳)は非職軍医の娘でピアノ教師をしている。「非職」とは職務に従事していないこと。休職というか。現役ではない軍医と理解する。

ある冬の夕方、ピアノ稽古から家路に急いでいた彼女は泥酔した近衛士官3名により誘拐され聖彼得堡の場末にある「紅茶屋」に連れ込まれた。

酒に酔ったうへの犯行だから誰が読んでも憤激するだろう。下は寅半生の感想だ。引用文の登場人物名は紅葉訳をカタカナ表記にして使用する。

【寅半生】柯列基等三人、本系貴族、并非風狂之輩、觀其后任罪不辭、毫无推諉、人品可知、特為酒所誤、幾使毀家辱身、甚矣、酒之為害烈矣哉！485頁

クレキら3人はもとの貴族であり気が狂った輩では決してない。その後は罪を認め責任逃れをすることもなかったところを見れば人品がわかる。酒のために特に誤り家を犠牲にし自身の名誉を傷つけてはなはだしい。酒の害は激しい！

寅半生は呉城らが後に事件の揉み消しを計っ

たことは無視している。犯行を結局は酒のせいにした。

娘の家では両親らが帰宅を待っている。帰宅した蕾又は自分が被害者となったことを告げる。

事件発生の時間はほぼ12時を過ぎた頃だ。時刻を取り出す。

紅茶屋の客が引いたのは「十二時頃（十二点將近）」（5頁／上4頁）、士官たちが女性を拉致しようとしたのが「十二時（十二下鐘）」（7頁／上5頁）という。拉致現場は「寂しき町の氷る真夜中（奈何這万籟寂闕鬼神出現的冰雪深夜之中）」（10頁／上7頁）でこれらは士官たちの感覚だ。娘の帰宅を待ちわびる両親が聞くのは「時計は此時十時を打つ（自鳴鐘。已鏗鐘打了十下）」（16頁／上11頁）「折から聞こゆるチャアチの鐘は十時半（那時剔搭剔搭の自鳴鐘。已到十下半）」（18頁／上12頁）。後に事件の概要を貴族たちに向けて説明する陸軍参謀長は「夜の七時頃（夜間七下多鐘）」（41頁／上27頁）とする。

事件当事者と警察の記録が時間的に一致しない。小説そのものが時間を前後させて説明しているためだ。あるいはそれぞれの記憶が混乱しているといってもいい。数字を細かくあげたのは呉禱が底本に忠実であることを示すためだ。数字を入れ替える漢訳があるから気になっている。

紅葉訳の「チャアチ」はいうまでもなく教会を意味する。呉禱は勘違いして時計の「剔搭剔搭（チクタク）」にした。日本語のカタカナ表記について呉禱は時々誤訳をするその1例だ。それ以外は時刻について齟齬はない。ついだから勘違いの例をひとつ示しておく。紅葉訳に「菓袋も無い事言はしやるな」（315頁）がある。「益体もない」の当て字だ。「でたらめをいうな」という意味である。呉禱はそれを「你說没有菓袋麼（菓袋を持っていなかったと言うのか）」（下53頁）にする。日本語漢字の「菓袋」をそのまま流用して中身を理解していなか

った。些細な間違いである。

#### 4 肉体と精神

帰ってきた蕾又は父母に訴える。



口絵 謂はうやう無き不幸

【紅葉】残念なのは女の効無さに、其奴の為に名誉を傷けられて了ひました。体は然して汚されましたけれど、此の精神は、父様、母様、些も穢れずに潔白で居ますから、どうぞ堪忍して下さいまし。24頁

【呉禱】想今生今世被那一個兇人損害了声名。再也不能洗雪。但兒身体雖被汚辱。這精神心臟。却對著父親母親。一些也不漸[慚]愧。依然潔白無瑕。還求両老暫時忍耐則箇。上18頁

思えばこの世において悪人のために名誉を傷つけられてしまい、もう恥をそそぐことはできません。しかし私の身体は汚されましたけれどこの精神と心は父様母様に対しまして少しも恥じることはありませんし依然と潔白無傷でいますからどうぞ暫時

のご堪忍をお願いいたします。

「効無(かひな)さ」とは力を尽くした結果が出なかったという意味。呉禱漢訳にそれに相当する言葉は見えない。

紅葉訳の「父様、母様」は蓄又による呼びかけである。呉禱は「対著父親母親(父様母様に對しまして)」と修飾構造に変換した。かけ離れた漢訳ではない。ほぼ直訳とっていいだろう。

漢訳には問題はない。ただし別作品では採用している日本語の改行、カッコなどの記号(！と……は除く)は本漢訳では使用していない。日訳にある会話を示すカッコは話者名のつぎに「道」「問」「答」を置いて代用した。改行しないのはページに活字の空白を生じさせないための措置だろう。

商務版「説部叢書」は小冊子風にまとめるのが基本である。呉禱漢訳も全体を圧縮して上下2冊にまとめるための工夫だと考えられる。

性的暴行を結果として自分で防御できなかったことを悔やむ。蓄又是自分自身を責める。しかし原作者が巧妙なのはそこで蓄又の肉体と精神を分離させたところだ。それが「此の精神は……些も穢れずに潔白で居ます(這精神心臓……一些也不漸[慚]愧。依然潔白無瑕)」という台詞になっている。

蓄又が精神の潔白を堅持して自分の肉体に傷を負わせた犯人を追及していく。これが小説前半の主題である。具体的にいえば何か。「復讐」である。事件後に蓄又たちの取った行動を描写することが主要な内容なのだ。

蓄又是父に自分の決心を訴える。

【紅葉】父様、私は自分の不束から身を汚しまして、何とも申訳は御座いませんけれど、自ら犯した罪ではないのですから、どうぞ御勘辨なすつて、娘の蓄又に生恥を搔せた復讐をなすつて下さいまし。私は此の

復讐を為なければ生きては居りません、又此の復讐を為ない内は私は決して死にませんから！27頁

【呉禱】父親啊。兒因為自己不好。以致汚辱身体。兒實無話可說。但這罪却不是兒自己犯的。還要求兩老宥恕。暫時忍耐。替女兒麗查大大的雪恨報讐。兒若不能報這箇讐。再也不願生存在世。但這讐不曾報復之時。兒却也不甘立時就死… 上17-18頁

お父様、私が不十分なために身体を汚してしましましてまことに申し訳がございません。しかしこの罪は私みずからが犯したものではありませんからお許し下さりしばしご堪忍ください。娘のライサ[麗查]のために恨みを晴らし復讐を大いになさってくださいまし。私はもしこの復讐ができないならばもうこの世に生きていくつもりはありません。といってもこの復讐をしないうちは私は即座に死ぬということもありません…

呉禱漢訳は紅葉日訳をほぼなぞっている。

呉禱による独特な人称漢訳方法がある。主人公の名前は蓄又(らいさ)だ。呉禱は漢訳においてそれを流用していない。日本語読みをそのまま、あるいは近い漢音で写す。紅葉の蓄又には漢字で麗查を当てた。「リーサ」ならば「らいさ」に近い。幌尾(ほろお)を漢訳して霍洛華はそのままだ。ほかの登場人物にも日本語音にもとづいた漢音で文字を当てる。暴行事件の主犯でありロシア皇帝の勅命によって蓄又の夫となる呉城(くれき)は柯列基である。呉禱は時に「柯」1字で中国風の姓として使用もする。中国化とは違う独特の方法だ。その方法を採用する複数の作品がある。

## 5 復讐——階級の対立

復讐を誓った蓄又是泣き寝入りすることなく

警察署へ告訴状を提出した。犯人は近衛士官だとわかっている。一般庶民が貴族階級の人間を告訴した。「相手は国民の上流たる貴族(国民上流的貴族)」(92頁/上31頁)だ。しかも性的暴力の被害者というところが重要である。自ら名乗り出て貴族階級を恐れない。

ある日、呉城伯爵夫人(柯伯爵夫人)宅で貴族たちが集まっていた。その場で陸軍参謀長の口から事件の概要が伝えられた。概略を聞いていたのは犯人のひとり呉城中尉(伯爵。呉城伯爵夫人は伯母)にほかならない。呉城はひとりでは反省の心情告白をしている(50-53頁/上31-32頁)。しかし仲間と一緒に別のことを言う。

【紅葉】何とか工夫して法律の制裁だけは免れたいと考へて居るのだが、計は有るまいか。56頁

【呉構】想箇什麼法子。能免掉法律的處分。你們想想看。沒有妙策麼。上34頁

なんとか工夫して法律の処分を逃れられないか。みんな考えてくれ。妙策はないか。

呉城の個人的反省は仲間の共有するものにはならない。そこで彼らは貴族としての面目体面(貴族の体面 79頁、貴族全体の体面 92頁)を守ることを前面に押し出し関係者に手をまわして事件をもみ消そうとした。貴族階級の傲慢さを見せつける部分である。原作者がそのように書いている。仲間の姉(公爵夫人)に頼み込み警視総監に圧力をかけて調査を中止させる。

警視総監がいった「被害者の其の娘の名誉は何と遊ばします御考で(那苦主的声名[あの被害者の名誉は])」(83頁/上47頁)に対する公爵夫人の返答はこうだ。

【紅葉】那樣娘の名誉も何も有るもので御座いませうか!金さへ与れて遣つたら、其を持参に奈何なと形付くのです。欲いほど

金を取せて遣ります。83-84頁

【呉構】那種女子。還管得什麼声名麼。大不了給些銀錢。使他好好地遣嫁罷了。他要多少。就給他多少。還有何言。上47頁

あのような娘にどのような名誉があるというのでしょうか。せいぜいが金をくれてやってうまく嫁にやるだけのこと。欲しいだけやります。それ以上ということはありません。

醜聞を金で抑え込もうとする。貴族階級の人間が一般庶民に対して示す蔑視はこれほどまでにひどい。それがよくわかるように原作者は描写している。

一方で贖罪金を義捐金と称して1万5千ルウブル(一万五千盧布)を届けに来た。口封じのためだ。ところが蓄又と父の幌尾親子は受け取りを拒否する。あくまでも犯人たちに復讐する考えだ。親子は最後の望みをかけて慈愛深い呉城伯爵夫人に訴えた。呉城伯爵夫人は甥が犯人であることを知らない。

## 6 結婚の刑——新しい段階が展開する

とうとうロシア皇帝皇后が直接の判断を下すまでに至った。その結果、呉城中尉と蓄又是結婚すること(結婚の刑/婚刑)、犯人3名の全財産は新婦蓄又に譲ること、また3名は西比利亜(サイベリア/西伯利亞)に追放されることになった。その部分を引用する。

【紅葉】陛下は御声高く、「其方此娘と結婚を致せ。」

此の意外なる宣告を受けた呉城中尉は自失するばかりに呆れ惑うたのである。157頁

蓄又が犯人3名のうち誰が主犯かわからないと答えた。そこで皇帝は最年長者と最も富んでいるものは誰かと質問する。呉城が該当したか

ら彼を指名してその勅令が下された。

【吳禱】皇帝随高声道。就著你和這姑娘結婚。柯列基聽了這意外御斷的話。慌惚著沒了擺佈[佈]。只呆呆地不言不語。上86頁

皇帝は声高く言った。そちはこの娘と結婚を致せ。クレキはこの意外なご判断を聞くと呆然としてなすすべもなく、ただぼんやりと言葉もなかった。

吳禱漢訳は改行もカッコも使用しないから上のようになる。ほぼ直訳だと考えてよい。

被害者と加害者を強制的に結婚させる。ゆえに目次の章題は「九 結婚の刑(婚刑)」である。「聖断の名の下に結婚の暴刑に處せらるる(欽奉聖断受那結婚暴刑)」(160頁/上88頁)とも説明する。

財産剥奪とシベリアへの追放を免除するかわりに結婚するという選択肢もありえた。しかし原作者はその3件ともに同時進行させるという展開にわざとしたわけだ。

犯人3名が処罰される。その処罰が財産没収とシベリア追放だけならば蕾又の復讐は即座に完結してしまう。それがライサ父子にとっては本来の目的だったからだ。その時点でこの復讐物語は終了せざるを得ない。

物語を終わらせないために原作者が考え出したのが「結婚の刑」である。無理やり結婚させたからその後につながる。また財産が蕾又に移譲されたからそれをどうするかの問題も生じる。原作者のこの新工夫は作品を成立させるためのものだ。よく考えている。

該作品の重要点はこの「結婚の刑」に置かれている。これを契機に物語は後半部に続いていく。

道徳的に正しい間違いという判断の範疇を飛び越えていると知る必要がある。それを強要するのが皇帝だから異議を唱えるわけにはいかない。原作者はそのように作っている。いかにも

大衆小説らしい。意外な展開になるよう意図的に組み込んでいるのだ。

くり返すがこの婚刑は小説の重要点であり不可欠な要素だ。これがあるからその後も話は展開していく。ここには紅葉による変更はないと考える。小説の中盤で紅葉が独自に書き換えれば後半を創作しなくてはならなくなる。しかし小説の結末まで大筋に破綻は見られない。ゆえに原作がもともとからそうなっていると考える。

寅半生もこの部分に興味を示す。関連する2ヵ所を引用しよう。

【寅半生】御断結婚一節、実為千古奇聞、不特身受者出諸意外、即閱者亦無不驚以為異、所謂怨耦者非耶？ 485頁

勅令による結婚の部分は実に前代未聞の珍しい話である。被害者だけが意外に思っただけではなく読者も奇妙なことだと驚かないものはいないだろう。いわゆる不幸なつれあいではなかろうか。

【寅半生】以仇人為夫婿、况又虚挂其名、成礼後即充發而去、麗查心中、何等境界。妙在写来却落落大方、不露圭角、而一種怨恨情形、時流露於不言之表、此是筆墨善於写生處。485頁

かたきを夫にするもそれは名前だけの虚偽であり結婚が成立するとそのまま流刑となった。ライサの心中はいかなるものであったか。優れているのは描写して鷹揚で才気を外に現わさない、しかし怨みの状態は時に物言わぬ表情に露わとなる。この文章は描写がうまくいった個所だ。

吳禱漢訳には著者として紅葉の名前しか記していない。寅半生は著者が紅葉だと信じて疑わなかっただろう。中国人読者も「結婚の刑」は意外に感じた。原作者の意図は成功したといえることができるだろう。

蕾又は西比利亞へ追放となる直前の吳城中尉

と言葉を交わす。ここには後半の物語を準備するきわめて大事な意味が付与される。蕾又の心理状況を説明して次のようにいう。

【紅葉】 蕾「此度は陛下の思召を以ちまして、過分の御沙汰に預りましたので御座いまするが、私は決して箇様な結果を望みませんでしたのでは御座いません。何も彼も実に意外で、……………」

呉「然し、御満足で御座いませう。」

蕾「いいえ、決して是迄に貴方をお困め申す心は無かつたので御座います。今と成りましては恐れながら陛下の御聖断が酷に過ぎまするやうに私は考へますので。」165頁

【呉禱】 今番雖則奉陛下諭旨。但未免辦得太過。我是断不想望有這樣的結果。総而言之。都是出於意外。……柯列基道。是啊。你却是称心满意了。麗查道。哎呀。我实在没有存心。要害你到這樣。我只想這回陛下断的。实是過於嚴酷罷了。上91頁

この度は陛下の詔令を受け賜りましたが、しかしあまりにも苛酷にすぎます。私は決してそのような結果を望みませんでしたのはごさいません。結局のところ意外でありまして……クレキは言う。そうですか。貴方はご満足でしょう。ライサは言う。いいえ。私は本当にあなたをこうまで困らせるような考えはなかつたのでございます。陛下のご判断が残酷にすぎると私は思うだけでございます。

復讐を誓っていた蕾又の発言にしては後退した印象を与えているように見える。そうではない。ここが転換点である。

「陛下の御聖断が酷に過ぎます」とは何か。加害者3人の全財産を蕾又に移譲する。加えて西比利亜へ追放する。決定的なのが「結婚の刑」だ。

蕾又が望んでいたのは加害者3人を見つけ出し処罰することだった。ゆえに皇帝の判定が下された瞬間に蕾又の復讐は完結するはずだった。ところがあらたに加害者と結婚という状況が降りかかった。その新しい展開に蕾又が心理的負担を強く感じていると原作者は言いたいのだ。

裁判により「兇行者を罰しまするやうに(照例辦那罪犯)」(118頁/上64頁)「唯私の名誉を傷け、私の将来を害した者を罰して下さいれば、それで十分なので御座います(只求将那傷損小女子名誉。阻害小女子前程的人。照例懲辦。那已是十二分的滿意)」(122頁/上66頁)である。

法律に照らせば軽い判決が下されるだろう。それで十分な復讐になる。ただ皇帝の判断はたぶん勳位剥奪、財産没収となることが事前にすでに示唆されていた(123頁/上67頁)。蕾又は自分の受けた苦しみはそれらに劣らないと主張した。彼女はその程度の結果になることをあらかじめ了解し覚悟をしている。

ところが実際に下されたのは彼女の予想を大きく超えてしまった。流刑、財産移譲とそれに加えて加害者との結婚である。財産没収ならば国家の問題であって蕾又とは関係がない。ところが移譲となれば自分に関係してしまう。個人的な復讐は完結したにもかかわらず蕾又自身に大きな責任が降りかかってきた。それで「酷に過ぎます」という発言になる。

蕾又の予期しない厳罰により彼女の意識に変化が見られる。そのように書いているのは原作者にほかならない。

原作者は以後、復讐を終えた蕾又の心境の遷移転回を用心深く別の場所にも配置する。この小説を成立させるためにはそうすることが必要なのだ。

蕾又が呉城伯爵の不在にあつて伯爵家の管理を堅実に行なうなかで予想しない形で披露される。別荘に赴き亡き伯爵夫人の肖像画を見て蕾又は祈る。「願はくは、妾が斯の心の誠に愛で

て、速に吾夫をして、其憎悪を去りて、妾を憐れましめ給へ。(願母親愛我這一点誠心。快叫丈夫除去憎嫌我的心念。翻成憐我愛我愛)」  
207頁/上115頁

直訳になっているから日本語には訳さない。  
続く描写が蕾又の心根を告白している。

【紅葉】 実に蕾又は其の心の底に如此く夫を思ふのであつた。彼は廉潔自ら持ちて、苟も伯爵の勲位を恋はず、伯爵の財産を念はぬのではあるが、呉城伯爵其人をば忘るる能はざるので、彼の三名の中の誰と異き縁を結んだか、其は未だに知られぬのであるが、彼は自ら何故とも覚えずして、他の二人は今に到る迄も憎きに、独り呉城中尉のみは吾夫と定められざりし先より既に婉(いと)しらしいのであつた。207頁

【呉構】 看官們不知。麗查心裏。却如此思恋他的丈夫。他玉骨冰心。既不想伯爵的爵位。又不愛伯爵的家財。只一心一意不能拋忘柯列基一箇人。他也不知三人中。到底那一箇和他結下孽縁。只可怪那李薩兩人。他心裏至今還是厭惡。独有柯列基。從那不曾配婚為夫之前。早已起了一团愛情。不能自己。到得如今。更把前事忘在九霄雲外。但知我是柯列基的妻子。柯列基是我的丈夫。這箇情形。連自己也不知什麼原故。上115頁

読者のみなさまはライサが心の底にこのように彼女の夫を思っているとは知らないであろう。彼女は美しい骨で透明な心を持つすばらしい容姿であつたが伯爵の爵位を望みもせず、また伯爵の財産を愛してもいない。ただ誠心誠意クレキその人を忘れることができない。結局のところその3名の中の誰と罪の縁を結んだのか彼女は知らなかった。ただレイザウフとサワゲノのふたりだけは恨みに思い彼女は心の中で今でも嫌悪するのだが、独りクレキだけは結婚さ

せられ夫となる前よりすでに愛情のかたまりが湧きおこっており自分でもどうしようもなく現在ではさらに以前の事を天空の彼方に忘れてしまつてただ自分はクレキの妻でありクレキは自分の夫であることだけに分かっている。この状況は自分でもなぜなのかわからないのだった。

下線部分は呉構の加筆である。ここにはっきりと蕾又が呉城のことを愛していると書いた。読者に念を押ししたのだ。

原作者は物語全体を把握して意図的に操作しながら記述している。恋愛小説は最後に両人が結ばれてこそ成立する。これらの描写は物語の大団円へ収斂するように原作者が注意深く設定したいくつかの伏線のひとつなのだ。

以上が全24(最終は大団円)のうちの前半12章(回)である。

つけ加えれば呉構は紅葉訳第12章の215-223頁を漢訳して次の巻下第13回へ移動させている。

## 7 呉城の問題

蕾又が別荘に滞在中、地方の有力者波斯野(ペルシヤの)夫人が訪問してきた。彼女は好印象を持ったから地方の住民も同様に警戒心を解くことになる。蕾又は領内において病人に薬を施し、貧民に衣食を供給するなどの慈善を志した。

そこに住む呉城の妹絵蓮もそれに感激しシベリアの兄に賞賛の手紙を送った。妹が褒める、家僕が賞賛する。それらの手紙を読んだ呉城は怒りを燃やした。

【紅葉】 不和なれども骨肉の妹、他人なれども累代相恩の不破瀬まで、我が七生の怨敵たる匹夫に心を翻し、言を揃へて吾前に其の讃辞を呈する無面目、余と謂へば特難き人情かなと、彼を念ひ、此を思ひ、呉城

は足擦を為て口惜しがるのであつた。219頁

【呉禱】愛蓮雖和我不和。終是我的胞妹。福華斯雖是外人。也累代受我家厚恩。誰想他們。霎時變了心腸。親信著我七世冤讐的惡婦。把那不入耳的讚辭。送到我耳邊。呈到我眼下。原來骨肉家人。也是這般難靠。別的人更何消說得呢。柯列基左思右想。又恨又悲。到得末了。只落得數聲長歎。一言不發。下4頁

エレンは自分とは不和だが結局は妹だ。フハセは他人だが累代我が家の恩を受けている。その彼らがにわかになんか心変わりをしたとは誰が想像しようか。我が七生の怨敵である悪婦を信じあの不愉快な讚辭を自分の耳元に送り込み自分の目に触れさせようとは。骨肉の家族ではあるがそのようでは信頼しがたい。ましてや他人が何をいってやるのか。クレキはあれこれ思い恨んで悲しんだ。ついには長い溜息をついて一言も発しなかった。

妹と家僕がともに蕾又を賛美することに呉城は反発を強める。ここには犯人であるという罪の意識はない。そう描くのが原作者の意図だ。呉城が他人の助言を受け入れて考え直すとなれば物語は別の方向に進むだろう。あくまでも被害者ぶって蕾又を恨み続ける嫌味な貴族の呉城でなくてはならない。

呉城による上の心情吐露の意味はなにか。問題の所在が蕾又から呉城に移動していることを表示している。

被害者(麗查)は許したが加害者(呉城)が許さない。この奇妙な関係が発生した。これを維持することがこの小説の後半を動かす原動力となる。

【紅葉】彼は己の飽くまで夫を愛するに引易へて、伯爵の飽くまで己を愛せざるを知

るのであつたから、 253-234頁

【呉禱】料想我雖是那様愛他。他必定還永遠不愛我。下22頁

自分はいくらでも彼を愛しているとはいへ彼が自分を永遠に愛さないのを考えれば、

蕾又は呉城を愛し呉城は蕾又を憎悪する。この状況は物語が終了する直前まで続く。その対立はどのように消失するのか。それはまたいつなのか。読者はそこに注目するように原作者は導いている。小説の大団円であるだろうとは容易に予想がつく。

## 8 蕾又伯爵夫人

伯爵夫人となった蕾又についてすこし遡って述べる。蕾又は伯爵邸に赴いた。

【紅葉】其後蕾又は屢ば伯爵家を見舞つて、夫の手沢ある器具を眺めたり、蔵書を取出したり、又折節は老实なる不破瀬を召して昔語を為せなどして、当時の身上では其を消遣と為るのであつた。194頁

【呉禱】自此以後。麗查常常到丈夫柯列基家。查看監督。遇著沒正經事情。有時看望丈夫親手製辦的器具。有時繙閱架上的蔵書。又或独自心煩。喚過誠實忠良的老人家福華斯。和他談講談講從前的往事。上107頁

不破瀬(ふはせ/福華斯)は伯爵家の家人総代であり20年も呉城に仕えていた家僕である。呉禱は「誠實忠良の老人家(誠実忠実な老家僕)」と説明を添えた。それ以外は紅葉訳のままだ。

続けて蕾又について呉禱による少しの加筆がある。紅葉訳には存在しない。

【呉禱】除了這些。以外也沒甚消遣。至於什麼宴会。什麼嬉遊。什麼講演。什麼跳舞。

一概辞絶不到。也不像是高等婦女社会中人。更不合伯爵夫人的体統。上107頁

それらのほかにはどのような時間の過ごし方もない。宴会、旅行、公園、ダンスなどはすべて断って参加しなかったから高等婦女社会の人らしくなかったし伯爵夫人としての格式にも合わなかった。

この部分を加えることによって蕾又の堅実な生活態度がはっきりと理解できる。庶民の生活習慣を貴族階級に持ち込むという原作者の考えがより明確になっている。説明を増やした方がよいと呉構が判断すればそのように補筆する。直訳からは離れるが間違いではない。呉構の漢訳は上に見る通り細部にわたって考えている。行き届いているといえる。

蕾又は夫のいない邸宅と財産3人分の管理をする仕事に着手した。

彼女が直面して実践した事を簡単にまとめて紹介する。

1 夫となった呉城伯爵へ必要品および金銭を西比利亜に送り届ける。ほかの2人にも同様の措置をした。

2 呉城家の経済を把握し収入を増加させた。

3 呉城伯爵には妹絵蓮(ゑれん/愛蓮)がいる。絵蓮の息子が不審な急病になったのを蕾又は処方ほどこして助けた。蕾又は軍医の娘であったから術を学んで医学知識があったのだ。

4 絵蓮の夫圓磯生(まるそふ/馬羅叔)は変死していた。絵蓮が犯人だと噂される。蕾又はそれが冤罪であることを証明した。謎を解く探偵を思わせる行動を見せる。

いずれもが蕾又の無欲無心から出てきた実際活動である。寅半生はそこに注目して言及する。

【寅半生】麗查整頓門庭，不愧為賢婦，觀其前却金一事，即非尋常女子所能有此氣概。自後一切作為，求之古今列女伝中，何可多得？485頁

ライサは(伯爵の)家庭を整えて賢婦というに恥じない。金を断ったことを見ても尋常の女性がそのような気概を持つことはできない。後の一切の行為は古今の列女伝に求めて多くあるであろうか。

「金を断った」というのは蕾又が呉城伯爵邸に入ってその財産を私物化しなかったことを指す。

蕾又のとった行動の数々が邸宅および関係者ばかりでなく地方住民全員の警戒心を解いていた。ついには彼女に対しての高い評価が定まる。

【紅葉】元を糺せば非職軍医の娘の蕾又であるが、今は堂々たる呉城家の伯爵夫人、而も篤行と才識とを以て一郷の輿望を負へる其の貴人 277頁

【呉構】原来休職軍医の女児麗查。如今做了堂堂柯列基家伯爵夫人。品行才識。都成一郷模範。下34頁

もとは休職軍医の娘ライサであるが今は堂々たるクレキ家の伯爵夫人である。品行才識ともに一郷の模範となった。

蕾又個人に対する評価が上がるということは問題の焦点が呉城自身に移っていることを明確に示唆する。呉城の心境に変化は生じるのか。読者はそれを固唾を呑んで見守ることになる。

## 9 急展開

『寒牡丹』の基本になっているのが「被害者が許し加害者が許さない」という奇妙な男女関係であることは述べた。それを示す本文も引用した。もうひとつ示す。蕾又が絵蓮の冤罪(夫を毒殺した)を晴らしたあと呉城に対する自分の心情を告白する言葉だ。

【紅葉】私は最も愛して居ります。御神と皇帝とが賜はつた夫で御座いますから、私は何處までも其人に随ふべき義務が有ると信じます。然し、爰に一件謂ふに謂はれぬ心懸と申すのは、お話を致しますのも実は可耻いので御座いますが、彼の御三人の中で、私に対する罪の有るのは誰方だやら、其が今に知れませんが御座います。と申すやうな訳で御座いますから、殿様が少しも私をお思へ下さらんのは、或は子細の有る事では無いかと、然う考へますほど私は熱く情無いので御座います。330頁

【吳構】我怎能不愛他。這是神主和皇帝陛下賜給我的丈夫。我任到何時。任往何處。也該有終身隨從他的義務。因此我心間有一件難以形容的心事。雖和姑娘說來。實也萬分可恥。他們一夥兒三人之中。究竟在我身上犯罪的是那一箇。我至今也不曾明白。為了這箇伯爵或者始終懷疑不願留戀於我。這其間我怎能得知。若果然這般。我不是石沈大海。終身沒有一點指望麼。下62頁

私がどうしてその人を愛さないことができましょうか。神と皇帝陛下から賜った夫でございますから私は何時までも何處までも終身その人に従う義務があるのでございます。ここに私の心に形容しがたい懸念がございましてあなたにお話しするのもまことに恥ずかしいことでございますが、彼ら3人の中でわが身に対する犯罪をおかしたのは誰なのか私には今もってわからないのでございます。それで伯爵が始終私を疑い思いをおかけにならないのではないかと。そのあたりのことは私にはわからないのでございます。もしそうでありましたら大海に石が沈むように私には音沙汰もなく一生すこしの希望もないのでありましょうか。

「殿様」とは蕾又の夫である吳城を指す。蕾又の心は吳城に傾いてしまっている。いう

までもなく本小説における男女関係の究極的解決には相手である吳城の心境変化が必要だ。中心課題はすでに蕾又から吳城に移動してくり返す。大衆恋愛小説の結末は男女ふたりが結ばれるのが定型である。どのように描写説明してそこまで持って行くか。原作者の腕の見せ所とっていい。

2年を経てある知らせがある。西比利亜にいる吳城ら3人はチフスに感染しているという。蕾又は哀願の末に入手した特赦状を携えすぎさま不破瀬を連れて西比利亜に向けて馬車を飛ばした。ふたりの献身的な介護により吳城はようやく病床を離れることができるまでになった。しかし吳城は心情としてどうしても仇敵蕾又を許すことができない。加害者が被害者面をし続ける。ロシアの貴族が傲慢自分勝手に庶民のことなど何とも思わず敵対な態度をとっていることが原作者によって描写されている。

## 10 ひとつの手続き

蕾又をかたくなに拒否敵視する吳城であった。それでも病後の回復につれて蕾又に対する吳城の考えにも変化がきざす。蕾又と一緒にいると吳城の心は和らぐのだ。彼の考えを徹底的に変えるためには形式的ではあるにしてもひとつの手続きを必要とした。原作者が創造したのは離婚である。

以前に吳城が離婚のことを不破瀬に相談したことがある(371頁/下84頁)。それも伏線のひとつだ。読者は予感したであろうか。

吳城は帰郷後の計画を蕾又にたずねた。彼女は田舎へ引っ込んで一生を送ると返事する(379頁/下88頁)。そうして蕾又が離婚を要求する。

【紅葉】見ると、蕾又はいつか俯目に成つて、得も謂はれぬ胸の思を萎るる風情であつたが、其のまま餘は言はずして、彼の結

納の指輪(リング)を抽取つて呉城伯の前に差出したのである。381頁

【呉禱】只見他俯首垂肩。那風情宛轉。像是胸頭有說不出的難言。不知怎樣纔好。忽然陡的將手上帶著的指環。褪下來。撲的放在柯列基面前。下89頁

見ると彼女はうつむいて肩を落とし、えもいわれぬ風情であってまるで胸に言い出すことのできぬ言葉があつてどうしてよいかわからないようだった。にわか指につけていた指輪を抜き取るとクレキの面前にポイと放つたのだった。

呉禱が「撲的放在柯列基面前(クレキの面前にポイと放つたのだった)」と漢訳したのは間違いだ。紅葉日訳は「差出した」のであつて「ポイと放つた(撲的放)」のではない。蕾又の呉城に対する従来態度からしてあり得ない所作だと知るべきだ。

【紅葉】蕾「其は貴方へ御返納いたしますで御座います、どうぞお収め下さいませ。」381頁

【呉禱】麗查這纔開口道。這東西如今奉還。伯爵請收下為是。下89頁

ライサはそこでようやく口を開き言った。これはただ今ご返納いたします。伯爵、どうぞお収めくださいませ。

呉城は蕾又が渡そうとした財産計算表は勅命に背くと受け取りを拒否した。ところが同じ勅命である結婚指輪の方は受領した。離婚の申し出を承諾したという意味だ。明らかに勅命に違反している。

離婚してから呉城の方に変化が生じてきた。呉城個人の心理的変化を原作者は綴っている。

勅命による結婚を一度は破棄する必要があつた。その後、精神的に自由な環境において恋愛感情を発露させる。小説を大団円に導くために

はそういう手続きが不可欠だ。そう原作者は考えた。ここに紅葉の手による変更があるのだろうか。原作は破局したままで終わるのか。しかしそれでは大衆小説として成立しない。あくまでも主人公の女性にとっては当時の考えで結婚して平和な家庭を持つのが到達点でなければならない。

【紅葉】向來段々と世話に成り、苦勞を為せた挙句否応言せず離婚まで為て見れば、一生忘れじの憎悪も怨恨も痕無く消え去つて、彼は今蕾又に対して何等の介然たる者もあらぬ。始て雲を排いて月を看たる呉城伯は、月の麗しさを識つたので、憎む可く、嫌ふ可き蕾又は、敬す可く、愛す可き蕾又の誤解なるを漸く曉るのであつた。388-389頁

【呉禱】(柯列基)覺得麗查不在面前。很為沒趣。這箇心思想一起。不想把從前一生不忘的憎嫌怨恨。都消滅了。大有雲開見月景象。把箇可憎可嫌的麗查。翻做可敬可愛。下92頁

(クレキは)ライサがいなければ面白くなかつた。この考えがひとたび起きると以前の一生忘れじの憎悪怨恨はすべて消え去り雲が開いて月をみるようなもので、憎むべく嫌うべきライサは敬すべく愛すべきものに变身した。

「一生忘れじの憎悪も怨恨も」部分を見れば呉城が加害者であることをすっかり忘れている。貴族階級の人間が自分を特別な存在であると無意識に思っているのだ。著者がそのような人物に造形していることを忘れてはならない。

原作者にとって離婚は行なうべき手続きをやつたという認識であろう。しかし小説作品として成功しているかどうかの判断は読者にゆだねられる。無理やり辻褄を合わせたという感覚、すなわち違和感が残れば問題だ。

特に蕾又の次の発言は問題にする人もいるだろう。

【紅葉】雷「いいえ、取だ事を有仰います。私は決してお怨み申すなどと云ふ事は御座いませんのですから、然やうな御心配は御無用に遊ばしまして。却つて私こそ心にも無く針ほどの事を棒に致して、御名誉を傷けましたのみならず、那云ふ憂き目をお見せ申しましたのは、皆私の不束から為しました業で、今と成りましては何と申上げて宜いのやら、どうぞ御勘辨遊ばして下さいまし。」394-395頁

【呉構】哎呀。伯爵說的没来由的話。我断没有怨伯爵的事情。伯爵何須多心呢。我不但傷害伯爵声名。連伯爵遇見那樣不幸。枉受那樣刑罰。全然我的罪過。如今只求伯爵恕宥。下95頁

いいえ、伯爵のおっしゃることには根拠がございません。私は決して伯爵をお怨みもうすことはございませんのです。伯爵はどうぞお気を回されなきように。私は伯爵の名声を傷つけましたのみならず伯爵にあのような不幸にあわせてしまいあのような刑罰までむだに受けさせてしまったのは全く私の過ちでございます。どうぞ伯爵のお許しをいただきとうございます。

被害者が加害者に謝罪するというのを許さない読者もいるはずだ。しかし原作者にしてみればそれに至るまでに十分に説明し手は打ってあると考えているだろう。

呉城はあの夜の事を告白した。「嘗て酒興の上で貴方を苦めたのは私です！（那乗著酒興。欺侮夫人的。正是我啊！）」（395頁/下95頁）

それにしても蕾又が事件後に見せた妥協を知らず犯人に復讐するという強い決意はなにだったのか。読者の中にはそう思う人もいるはずだ。くり返すがここに至るまで原作者はいくつかの

伏線を張ったことはすでに述べた。すべては原作者の意のままに筋を運んでいる。紅葉が独自に変更した可能性はないと感じる。

聖彼得堡へもどる馬車の中である。

【紅葉】（呉城は蕾又を抱き起し）有無を言はず彼の環（リング）を其指に穿した。396頁

【呉構】一面將麗查全身抱起。抓過他的手指。將指環依旧替他套上。下96頁

ライサを抱き起し彼女の指をつかむと指輪をもとのままにはめた。

【紅葉】呉「どうぞ其は改めてお受け下さい、どうぞ、どうぞ。私が前非を悔い、罪を謝し、而して貴方への恩を返す其が証であります。私は最愛の妻として一生貴方を棄てません。貴方も一生私を忘れずに……」396-397頁

【呉構】只求你。……只求你。……我已悔改前非。向你謝罪。這就是立意報答你恩情的証據。你是我最敬最愛的妻子。終生終世。也不敢拋忘了你。你也此生世。莫捨棄了我。……下96頁

どうぞ……。どうぞ……。私が前非を悔いあなたに罪を謝します。これがあなたへの恩を返す決意の証拠です。あなたは私が最も敬愛する妻です。一生捨てることはありません。あなたも一生私を捨てることのないように……

大団円である。こうして馬車は聖彼得堡の駐車場に到着した。

車中の再婚儀式について納得しなかった人のひとりが寅半生だ。ここに苦言を呈している。

【寅半生】柯列基為女而充軍，一腔怨恨，自未能遽積。惟福華斯告之，不信，愛蓮告之，不信，至隻身尋夫，竭力調護，仍不能感動，卒至離婚，可為匪石難轉矣。何以轉

関如此易易？此處似嫌太率。鄙意到家后，宜實行離婚，女還產獨處，怡然自得。当由愛蓮知恩報恩，竭力斡旋，大費一番周折，然后破鏡重圓，則結局較為有味。况有柯夫人可用，有福華斯可效力，儘可欲擒故縱，欲合故離，騰挪变化，做一篇大好文章。作者見不及此，惜哉。485-486頁

クレキは女のために流刑となり満腔の恨みは自分ではにわかに取り除くことができなかった。フハセが話しても信じない。エレンが話しても信じない。(ライサが)単身で夫を探し当てて全力で介護したがそれでも動かすことができずついには離婚にいたる。石ではないから転がらないのだ。ところがどうしてたやすく転向したのであるうか。ここはあまりにも軽率であったようだ。愚見によれば帰宅したのちに離婚をすればよかった。女性に一人住まいさせれば心が和らいで満足するだろう。そうしてエレンが恩返しのために全力で仲裁し手数を大いにかけた後に夫婦が元の鞘にもどる。そうすれば結末が味のあるものになっただろう。さらにはクレキ伯爵夫人(クレキの伯母)がいて役立つしフハセにも効力がある。しっかり捕らえるためにはまずわざと放す、結合させるためにわざと離れさせる。場所をかえて変化をつける。そうすれば素晴らしい作品になったであろう。作者にはそれがわかっていない。惜しいことだ。

あっさりとした結末を迎えたことが寅半生には許容できなかった。もっと時間をかけて元鞘にすべきだったと提案している。作者(紅葉)の理解が不足していると批判してまでいる。苦情を述べたくなるほどよく書けている小説ということだ。

## 11 結 論

『寒牡丹』が性的暴行で始まるのは不幸なことだ。そこにどこまでもこだわる読者もいるだろう。その人にとっては作品の印象は悪い。解放感につながらないところが大衆小説らしくない。そう思う人も存在するはずだ。

一方で男女の恋愛小説の一変種だと受け取る読者にとっては違和感はそれほどないと思う。判断の分かれる個所だ。

しかし原作者からすれば作品を成立させるためにはその事件がどうしても必要だった。

ロシアの庶民の娘が貴族階級の近衛士官と出会う機会が普通にあるだろうか。かなりむづかしい。貴族は貴族同士で、庶民は庶民同士で生活圏を共有するだけ。日常生活において階級の違いは乗り越えられない。階級差を前にしては恋愛関係が発生する可能性はほとんどないといっている。

バーサ・M・クレイ BERTHA M. CLAY (本名シャーロット・M・ブレイム CHARLOTTE MARY BRAME、1836-1884) という作家がいる。紅葉の『金色夜叉』は彼女の“*Weaker Than a Woman*”を『不言不語』は“*Between Two Sins*”から影響を受けているという(堀啓子)。

中国でも彼女の漢訳は人気があった。クレイ名あるいはブレイム名義原作の漢訳作品を名前だけあげてみる(樽目録参照)。

『懺情記』(1905)、『一束縁』(1906)、『醋鴛鴦』(1908)、「古王宮」(1908-09)、『紅涙影』(1909)、『空谷蘭』(刊年不記、1911?)、『乳姉妹』(1916)、『僵桃記』(1921)など。ほかにも原作不明の漢訳がいくつかある。

ブレイムはいくつかの作品において貴族階級に乗り込もうとする庶民階級の女性を描いている。階級差のある男女の出会いを工夫した。学校で見知る、貴族の邸宅で働いていた親がいた。関係をたどって若い娘が貴族の邸宅に入って恋愛が発生するという小説だ。

ブレイムが創作した女性は個人意志あるいは関係者の入れ知恵により、はたまた自分は知らずに貴族の屋敷に行く。いくつかの変形を作った。邸宅に入った後はやりたい放題をする女性を描く。それに対する静謐な女性を配置して対照の妙を演出するばあいもある。

『寒牡丹』の女性主人公が階級の壁を乗り越えて行くという構造はクレイ作品と似ている。しかし決定的に異なる部分がある。性的暴行事件によってふたりが知り合う箇所だ。その設定は独特のものである。復讐を求めた結果が相手

の流刑、財産移譲、結婚の刑につながる。皇帝の命令で伯爵夫人になった。伯爵邸に入ったが自由奔放にふるまうことはない。堅実に財産を管理して地域の慈善医療にも心を配る。最終的に相手の愛情を獲得する。

女性主人公に艱難辛苦をあたえ彼女がそれをどのように克服するかを描写する。恋愛小説としての構成はしっかりと作られている。

呉禱の『寒牡丹』は口語(白話)を使用して基本的に優れた漢訳である。 罫

人名対照表

紅葉	呉禱	備考
蕾又(らいさ) 幌尾(ほろお)	麗查 霍洛華	18歳。19歳117頁。非職軍医の娘。ピアノ教師。皇帝の命令で呉城と結婚させられ伯爵夫人となる
呉城(くれぎ) 中尉	柯列基 参将	暴行の主犯、伯爵夫人の甥
靈象府(れいざうふ) 伯	李召夫 参将	暴行犯のひとり、姉の阿茅淳(あぢぬ/夏狄那) 公爵夫人に警視総監筆絡を依頼
沢毛野(さわげの) 子爵	薩開那 参将	暴行犯のひとり、伯父は大臣
呉城伯爵夫人	柯伯爵夫人	呉城の伯母。歎願を受け付ける。ライサ父の歎願を皇帝に取り次ぐ
繰布(くりぬの) 将軍	克利努 将軍	警視総監
絵蓮(ゑれん)	愛蓮	呉城伯爵の妹 12年前夫圓磯生(まるそふ/馬羅叔)は変死 小鞠野(こまりの/科馬利奴)に在住
利喜三(りきさ)	列幾	絵蓮の息子
不破瀬(ふはせ)	福華斯	伯爵家の家人総代
諸座(もろざ)	穆羅若	圓磯生殺害の犯人
鷺利(わしり)	華息利	圓磯生に仕えていた馭者、圓磯生殺害の共犯者
波斯野(べるしやの) 夫人	貝繡娜	地方の有力者
近小野(ちかうの)	季柯那	リウマチズム患者、圓磯生殺害犯人を告げる

【注】

- 1) 山田有策+木谷喜美枝+宇佐美毅+市川絃美+大屋幸世編『尾崎紅葉事典』翰林書房2020.10.28
- 2) 荒井由美「呉禱についての文娼論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1
- 3) 秋山勇造「長田秋濤」『埋もれた翻訳——近代文学の開拓者たち』新読書社1998.10.20
- 4) 酒井美紀『尾崎紅葉と翻案——その方法から読み解

く「近代」の具現と限界』日本・花書院2010.3.10

- 5) 田中彌十郎「長田秋濤の著作」『書物展望』13巻3号1943.3.1。なお田中が調査したという「秋濤著作年表」が次に収録される。長田秋濤遺稿『凶南録』教育科学社1943.7.10。これには「寒牡丹(秋濤紅葉共訳) 明治三十三年一月 読売新聞」(39頁)とある。
- 6) 覚我(徐念慈)「余之小説観」『小説林』第9期

戊申(1908)年正月

- 7) 中村忠行「晚清に於ける虚無党小説」『天理大学学報』第85輯 1973.3.21。143頁
- 8) 徐兆璋著、蘇醒整理『徐兆璋雜著七種』南京・鳳凰出版傳媒股份有限公司、鳳凰出版社2014.3 中国近現代稀見史料叢刊 第1輯
- 9) 寅半生「小説閑評」『遊戯世界』第1-18期/阿英編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究卷』北京・中華書局1960.3上海第1次印刷/台湾・文豊出版公司1989.4影印本。484-486頁
- 10) 付建舟『晚清民營書局發行書目』上下冊 哈爾濱・黑龍江教育出版社2016.12
- 11) 吳禱が原作者(紅葉)にからめて加筆している。  
「看官。若是俺們中国旧時説部。凡是遇見什麼進宮引見欽審要案那些事。必有一場大大的叙述鋪排。使看官們十色五光天花乱墜。但如今做這部小説的人。他生在立憲政体国中。像俄羅斯那樣專制政体政治敗壞之國。君主雖則威風。他心裏並不羨慕。以為万万不如他自己國中制度。要好得多。所以將那專制君主的威嚴顯赫。什麼九重天子。什麼天下一人的俗套話頭。一筆抹煞。不願意提起。這就是和別的小説不同之處。看官們。也須領會這一番意思不可輕略看過。」上85頁

吳禱漢訳『美人煙草』  
——広津柳浪『美人萇』

荒井由美

1 誤記からはじまる

吳禱漢訳『美人煙草』の原作者について誤記がある。雑誌初出と後の「説部叢書」所収本の記述が異なるという珍現象だ。版元の商務印書館編訳所による不注意あるいは手違いである。いくつかのうちのひとつだ。

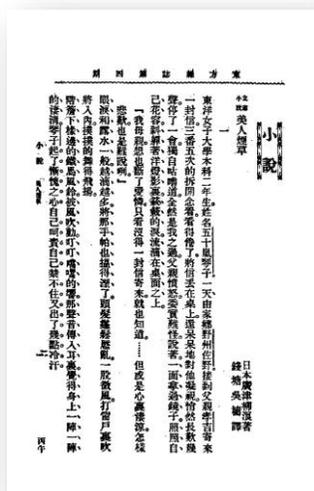
雑誌の記載は次のとおり。

日本広津柳浪著、錢塘吳禱訳「(立志小説)美人煙草」8節 『東方雜誌』第3年第4-7期 光緒三十二年四月二十五日・六月二十五日(1906.5.18-8.14)

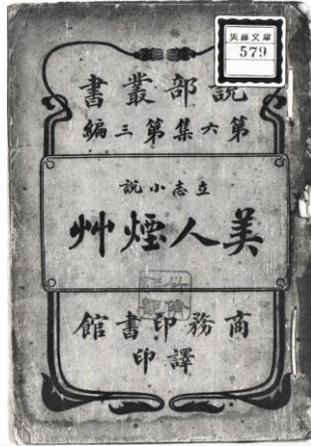
ここには広津柳浪と確かに書いてある。

ところが該作が商務印書館の「説部叢書」に収録された時、異変が発生する。原作者名を別のものに差し替えた。のちの研究者は初出雑誌よりもこの「説部叢書」本の記述を引用することが多い。その理由のひとつは阿英目録にある(後述)。

日本尾崎徳太郎著、錢塘吳禱訳『(立志小説)美人煙草』上海・中国商務印書館、光緒三十二年歲次丙午季夏首版/光緒三十二



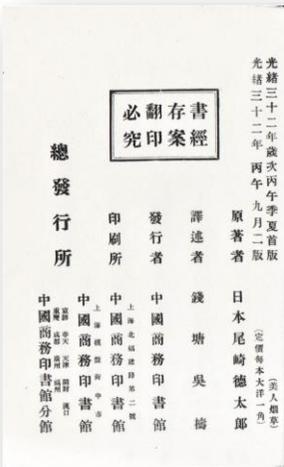
年丙午九月二版、説部叢書第六集第三編



丙午年十月初版  
 中華民國三年四月再版  
 (美人煙草一冊)  
 (每冊定價大洋壹角)

原 著 者 日 本 尾 崎 德 太 郎  
 譯 述 者 杭 縣 吳 棣 橋  
 發 行 者 上 海 中 法 大 學 書 館  
 印 刷 所 上 海 中 法 大 學 書 館  
 總 發 行 所 中 國 商 務 印 書 館  
 分 售 處 中 國 商 務 印 書 館 各 分 館

★此書有著作權翻印必究★



美人煙草 第一節

東洋女子大木村生姓名五十屋琴子。一天出家鄉野村寄到父親明  
 面書來一封也。一番五次的拆開查看。看不得了。將信丟在桌上。連米湯對他也  
 罵。而長歎聲。停了一會。獨自暗想。全然是我之過。父親這委實冤枉。說者  
 一面。我思。原自己花容。雖若洋容。影影。數數的。淚。流。滿。在。桌。面。之。上。  
 「我母親也斷了髮。只看見得一封書來。也就知道……但或竟心裏注  
 意。怎樣說。也是難說呢。」  
 說。完。這。話。眼。淚。一。點。一。點。流。下。他。也。想。道。這。一。股。風。打。雷  
 戶。裏。吹。將。人。肉。撲。撲。的。舞。得。飛。揚。  
 隨。着。下。樓。步。踏。踏。的。風。吹。動。叮。叮。咚咚。的。響。聲。響。傳。入。耳。裏。覺。得。身。上。一  
 陣。冷。意。他。也。想。道。這。一。股。風。打。雷。戶。裏。吹。將。人。肉。撲。撲。的。舞。得。飛。揚。  
 實藤文庫

實藤文庫

紙はリボン文様に変更。同時に全100編を通し番号に振り直した。「初集第53編」だ(元版と区別するためにアラビア数字を使用する)。訳者については元版の「钱塘」が「杭県吳棣訳」となる。民国になって名称が変わっただけ。

初集本のもうひとつの問題は奥付の「丙午年十月初版/中華民國三年四月再版」とある個所だ。

この初版刊年が違う。元版には「丙午季夏」とあって旧暦六月だ。初集ではそれを旧暦十月に誤記している。どうしてそうなるのか。こちらも理解不能である。

当時の商務印書館編訳所は刊年についての管理が厳密ではない。発行年月の記載は出版社として明確に把握するものではないのかと訝る。どこか抜けている。原作者を別人にしたのもその例のひとつである。

商務印書館本では別に似たような2例があることを述べておく。こちらも雑誌初出から後の「説部叢書」に収録する際に発生した。

例1：原作者不記、訳者不記「空谷佳人」(『東方雑誌』第3年第8-13期 光緒三十二年七月二十五日・十二月二十五日(1906.9.13-1907.2.7))だ。これが元版の「説部叢書」第七集第三編(1907)に収められたとき「英国博蘭克巴勒著、商務印書館編訳所訳」と新しく記述した。もともと原作者不記にもかかわらずどこから博蘭

雑誌掲載では本文にあった原作者、漢訳者を奥付に移動させた。それはいい。しかしもとの原作者広津柳浪を変更して尾崎徳太郎(紅葉)にしたのだった。なぜ変更したのか。誤植ではすまない。間違っている。意味が不明である。

上の「説部叢書」は元版だ。全十集で各集は10編。集ごとに第一十編の数字を割り当てる(初集本と区別するために漢数字を使用している)。つまり第一集第一編から第十集第十編までの全100編構成である。だから該作には「第六集第三編」と番号が振られる。二版の表紙はタンポポ文様だし扉は初版のものを使用している。写真を見ていただきたい。

元版十集は再編成されて初集と改称する。表

克巴勒を取り出してきたのか。不思議ではない。

しかも阿英目録は「英 博蘭克巴勒著。林紓訳」(127頁)と記録した。書物には林紓訳はどこにも書いていない。阿英による誤記である。さらに続けて「又東方雜誌本」と記述した。まるで初出の『東方雜誌』にも原作者と林紓の名前があるかのような印象を与えることになった。この間違いは21世紀になっても威力を發揮した。

それについて馬泰来は「林紓翻訳作品全目」(『林紓的翻訳』北京・商務印書館1981.11. 98頁)で「已檢原書、翻訳者実皆為商務印書館編訳所〔原書を点検したが翻訳者はすべて商務印書館編訳所となっている〕と述べた。阿英が「林紓訳」としたのは誤りだと「遠まわしに」説明したのだ。阿英に対する馬泰来の尊敬度の高さをうかがうことができる。

馬泰来の指摘がある。にもかかわらずほかならぬ阿英が該漢訳を林紓としたから影響力が強い。彼の学術的権威は以前から相当に大きい。その結果この誤りが流通した。いくら阿英目録の間違いだと指摘されても耳をかさない人がいる。実物で確認する気がないのだ。

その例を近くは上海書店出版社編『林紓訳文全集』第11冊(上海書店出版社2018)に見ることができる。馬泰来が訂正してから37年後のことだ。該全集に雑誌を影印したものを収録した。そうしたのは林紓だと思いついて入れているからだろう。だが事実は林紓ではない。そういうことをするから「全集もどき」だと評される。利用者からいえば間違いだと知って使用すればいいだけ。

ついでに述べれば注目すべきは古二徳が漢訳者を甘永龍だと明記したことだ(「《深谷美人》罕見林訳与《空谷佳人》訳者考辨」『清末小説から』第117号 2015.4.1)。

さらに「説部叢書」で提出された原作者の博蘭克巴勒は架空の人物だという説もある。書名の「空谷」を翻訳して BLANK VALLEY とし

た。さらに漢字をあてて著者は「博蘭克巴勒」である\*1。

例2:(日) 押川春浪著、中華吳禱亶中訳『(冒険小説) 侠女郎』(『小説月報』3巻10-11号 1913.1-2.25)である。これも「説部叢書」2集第47編(上海・商務印書館1915.5.26/10.14再版)に収録されると(日) 押川春郎<sup>ママ</sup>著と誤記された。通音するが漢字が違う。誤記にしても無神経だ。なんだろうか。

さて『美人煙草』について版元の記述が一致しないから後の研究者も戸惑う。

それに加担したのはここでも阿英目録だといっていい。

美人煙草 日本 尾崎徳太郎著。吳禱亶。光緒三十二年(一九〇六) 商務印書館刊。又東方雜誌本。132頁

上の記述について説明する。「刊」とは単行本として出版されたという意味だ。日本尾崎徳太郎著、吳禱と記述したものが1906年に出た。ここでは「説部叢書」を省略している。阿英は角書と叢書名(小本小説、欧美名家小説、袖珍小説など)は目録に採録していない。それに続けてここでも初出の『東方雜誌』を掲げる。読者は雑誌も尾崎徳太郎となっていると思うだろう。初出雑誌は広津柳浪であったと注釈をつけなければならなかった。阿英の採用した編集方針の問題だ。いまさら注釈が必要だったといっても手遅れだが。

## 2 吳禱漢訳『美人煙草』の寅半生評

寅半生「小説閑評」(刊年不記、1906?)<sup>\*2</sup>に説明がある。吳禱漢訳を4種類とりあげて説明したそのうちの1種がこの『美人煙草』だ。作品の粗筋と感想を述べている。『美人煙草』刊行直後の文章だといっていい。以下のとおり。本文のみ翻訳する。

〔立志小説〕美人煙草 日本尾崎徳太郎原著 錢塘吳禱訳述 商務書館印行

是書凡八節。絃私立大学学生吉見義久与女学科学生五十嵐琴子相契，若無学費，勢將黜業。琴子自願力任苦工幫助吉見，私在源兵衛村開設煙草鋪，賺錢以供吉見学費衣服等用。二年後，吉見卒業，因被友人金原揭破，並添設汚蔑等語，遽形反目。及查明原由，互和認罪，而琴子已決意守貞不字云。

前半写琴子为成就学業起見，力任艱苦，深情款款，那得不使吉見五体投地，迨金原証明来歴，陡然決裂，為琴子者，其何以堪？終身不字，人謂其立志可嘉，而実則其勢有不得不如此者。501-502頁

本書は全8節。私立大学学生吉見義久は女学科学生五十嵐琴子と意気投合していたが学費がなくなれば学業をやめざるをえない。琴子は吉見を助けるために自ら願ひ出て苦しい仕事につくことにした。源兵衛村で個人のタバコ屋を開き金を稼ぎ吉見の学費衣服などの費用に提供した。2年後、吉見は卒業したが友人金原に告発され中傷のことばを加えられたためにわかには仲たがひした。のち原因を明らかにして互いに誤りを認めた。しかし琴子は操を守り嫁がないとすでに決意していた。

前半は琴子が学業成就のために大きく努力する。情け深く心がこもっている。どうして吉見が地にひれ伏さないでいられよう。(後半は)金原が素性を明らかにしたので突然に決裂してしまった。琴子としてはどうしてそれに堪えられようか。一生嫁がないことにした。人はその志を賞賛すべきだが、しかし実のところ趨勢はそうするしかなかったのだ。

「女学科学生」は誤植だと思う。原作は「東洋女子大学の本科二年生」だ。漢訳の「女学」

は「女子大学」また「科」は「本科」とするのが正しい。

寅半生は前半で小説の流れ全体をまとめた。登場人物は琴子と吉見のふたりを中心にして琴子を取り巻く学生金原たちがいる。正しく理解していることがわかる。そのあとで寅半生の読後感を述べる。主人公が琴子であることを把握しているのがよい。琴子に対する他人の悪意による中傷が吉見との感情的なもつれとなり破局につながったと説明する。

原作者を尾崎徳太郎と間違っている。寅半生が読んだのがそう表示する「説部叢書」本だからだ。初出の『東方雑誌』に言及していないからそちらは見えていないのだろう。

### 3 柳浪「美人菘」と吳禱漢訳

広津柳浪(本名直人、幼名金次郎、1861-1928)は長崎市で生まれた。旧制外国語学校でドイツ語を学び帝国大学医科大学予備門に入ったが興味もなく病気のため廃学する。小説を発表した後に博文館に入ると尾崎紅葉を知り硯友社同人となった。作品の一部は深刻小説、悲惨小説と呼ばれて知られる\*3。

田山花袋は柳浪と硯友社の人々について次のように書いている。関連する2ヵ所から引用する\*4。

かれ(川上眉山)はかれが多年一緒に歩いて来た紅葉、水蔭、漣、柳浪、思案、そういう人たちに多くの不満を抱き、どうかしてその旧い駄洒落、場当り、結構、通俗から脱しようとした傾向は、当然の結果として、かれを硯友社同人の勢力から遠ざけて行くような形になって行った。硯友社同人の中では、柳浪も継子であったが、眉山君もまた後には継子扱いをされるようになった。224-225頁

三十年間、私の見て来た日本の文学者の

交遊では、紅葉を中心にした硯友社が一番賑やかで面白そうであった。かれらは一緒に飲み、語り、かつ伴れ立って旅行した。しかしその交遊なり旅行なりが、興味を中心にしたもので、互に啓発したり互に励まし合ったりするものでなかったことは事実である。かれらの旅行は駄洒落と道楽と興味との旅行であった。これが即ちその交遊が面白そうに見えたり思われたりするところで、単に対面的に過ぎなかったのである。眉山君などは、後にはその交遊の愚なることを度々私に滴した。271頁

硯友社同人になった柳浪は花袋から見るとそのような立ち位置だったらしい。つまり硯友社の人々と肌が合わなかったと理解する。

(広津) 柳浪「美人萇」(『太陽』第11巻第12-13号 1905.9.1-10.1) は2回に分載された。最初の1と2(章)が前半である。後の3-8(章)で完結だ。



東洋女子大学学生の五十嵐琴子は某私立大学学生吉見義久と相思相愛の仲だった。それが原

因で琴子は親から学資を止められることになる。吉見は亡父の旧友に住居を提供され学資を出してもらっていたがこちらも素行不良を理由に放逐となった。双方ともに経済的な理由で切羽詰まるのだ。

作品冒頭の柳浪と呉構漢訳を比較対照する(ルビ傍線省略。以下同じ)。

【柳浪】東洋女子大学の本科二年生五十嵐琴子は、郷里なる野州佐野の父孝吉より来た手紙を、幾度か読返して居たが、力なげに机の上に置き、尚ほ凝視ながら悄然として太息を吐いた。

暫時してから、『全く私が悪くツてよ。阿父さんの御怒なすつたのも、御無理ではないは。』81頁

【呉構】東洋女子大学本科二年生。五十嵐琴子。一天。由家郷野州佐野接到父親孝吉寄来一封信。三番五次的拆開念看。看得倦了。将信丟在桌上。還呆呆地对他凝視。悄然長歎幾聲。停了一会。独自咕嚕道。全然是我之過。父親憤怒。委實難怪。1頁

東洋女子大学本科2年生五十嵐琴子はある日、郷里野州佐野から父孝吉が寄こした手紙を幾度も開いて読んで疲れてしまった。手紙を机の上に置くと呆然としてそれを眺めながら悄然と幾度か嘆息した。しばらくしてからひとりつぶやいた。全く私が悪いの。お父さんが腹を立てるのも本当にもっともだわ。

呉構は本作について固有名詞は日本語のままを使用している。こちらの原作は柳浪の創作であり舞台は日本だからだ。外国作品のばあいは普通にカタカナ表記が出てくる。それを漢訳する必要のあるのは事情が異なる。

上の漢訳を見ればほとんど直訳といっていただろう。改行を無視し独白をカッコで括らなかつたくらいの違いだ。

琴子は父から学費停止の手紙を受け取った。吉見義久は亡父の友人麻見から住居と学資を支給されていたが追い出された。義久の「素行が修まらんから」(83頁)というのがその理由だ。呉禱漢訳はそれを「我自己品行不正 [私自身の素行が悪い]」(6頁)とした。ここではそこまでに止めて具体的に記述しているわけではない。

続く部分で説明がある。すなわち「二人の間に情交は、既に二年近く続き来たつた」(83頁)だ。ここの「情交」とは親密な交際よりも一般的に肉体関係を指すと考えてよい。呉禱は「你道他二人是怎样情形。原来心投意合。私下定情。已有两年以来 [彼らふたりはどのような状況かといえどもとから意気投合しひそかに結婚の約束をしてすでに2年になる]」(7頁)とする。柳浪よりも控えめな漢訳にしたことがわかる。

琴子と義久は双方ともに学資などが停止するところまで追い詰められた。その理由はふたりが保護者に秘密で交際しているからだ。金がなければ兩人ともに生活していくことができない。

ふたりが相談した結果はこうだ。琴子は大学を退学しひとりで働く。義久は琴子の援助を受けて学業を続け卒業を目指す。琴子が下宿を出たあとに豊多摩郡高田村内源兵衛村にタバコ屋が開かれ美人煙草との評判がたった。以上が前半部だ。

ここで注目すべきは琴子が行なった義久に対する説得である。義久は学業をやめて田舎で終生土いじりをするという。琴子はそれに反対して自分の意見を理路整然と述べる個所を見る。

【柳浪】吉見さん、貴方は御郷里で、一生土掘を為てお終りでも、貴方の御父さまにお濟みなさること。貴方は常も私に何云ツて居らシツて、父は終に不遇にして世を去つたから、僕は父と二人前の仕事を為て、父の名も揚げるんだツて、始終私にお話しなすツた事よ。貴方、彼は好加減な事を言つて居らツつたの。ま、左様ですか、麻

見さんが保護して下さらなきやア、貴方はもう何も出来ないツて——御自分の力では、もう何も出来ないツて、御自分から御自分を捨て、御了ひなさること。私は其様方ぢやないと思ツて、よ。私女ですけれどもね、貴方の様に失望しやアしくツてよ。84-85頁

【呉禱】吉見兄。你回到家郷。種田掘土。過此一生。你也須想想你老大人的身世。你怎樣常对我說。道我父親一生不得意。抑鬱去世。我一身兼著父親的事。定然要替父親揚名。這話可有麼。你既說了那樣話。却原来是信口胡言。並不想著實去做。如今。麻見先生不能保護贍養於你。你却什麼也不能作為。你自己的力量。原来什麼也不能作為。只索自己拋捨自己。落得箇自暴自棄罷了。我却想不到你是那樣人材。我雖是女子。也不致於那樣失望短氣咧。10頁

吉見さん、あなたは郷里に戻って畑を作り土を掘ってそんな一生を過ごすのかしら。あなたのお父様の境遇を考えなけりやなりませんよ。あなたはいつも私にどうお話しなすっていたか。僕の父は一生満足できず悶々として世を去ったから僕はまったく父親と二人分の仕事をして父親に替わって名を揚げるんだとおしゃっていたわ。そうでしょう。あなたはそうお話しなすつたのはでたらめで本当にやる考えはなかったのね。いま麻見さんが貴方を保護養育してくださらなきや、あなたは何もできないなんて。ご自分の力では何もできないって、ご自分からご自分を捨ててしまつて自暴自棄になるなんて、私はあなたがそのような人だとは思ひもしくつてよ。私は女ですけれどもそのような失望短気にはならなくつてよ。

まず柳浪の文章が言文一致であることに注目する。琴子の話し言葉そのままに記述していることがわかる。

それを漢訳した呉禱もまた白話文を使用して柳浪日文を生き生きと写し取っている。見事というほかない。

1919年五四前後に文学革命派が白話文を提唱したのは中国学界では定説になっていて有名だ。しかしそれよりも約10年以上も前に呉禱が軽々と白話文を使いこなした漢訳を公表している。この事実を見逃すことはできない。すなわち白話を主張した胡適および周氏兄弟を含む当時の文学革命派は呉禱による多くの訳業を無視している。

たとえば阿英『晚清小説史』(1937/1955)は呉禱の翻訳について次のように書いている(傍線省略。[ ]は1955年版)。

(林訳小説) 俄国的作品、雖也有六部，全成於辛亥革命之後。這一缺典[点]，在當時也有人補足了它。如吳禱，他從日文轉訳了萊芒托夫的銀鈕碑(一九〇七)，溪崖霍夫(按即柴霍甫[契訶夫])的黑衣教士(一九〇七)，……(後略) 1937年280頁/1955年184頁

就訳家方面説，除林紓而外，有幾個人是很值得注意的，如吳禱，他的訳作有薄命花，寒桃記(日本黒岩涙香)，車中毒針(英国勃来雪克)，寒牡丹(日本尾崎紅葉)，銀鈕碑，黑衣教士，美人煙草(日本尾崎徳太郎)，五里霧，俠黒奴(日本尾崎徳太郎)，俠女奴(日本押川春浪)，選本雖亦有所失，然其在文学方面的修養，却相当的高。1937年281頁/1955年185頁

日本語に翻訳しないのは基本的に書名と原作者を挙げているだけだから。ただ「作品の選択には行き届かないところはあるにしてもその文学方面的修養は相当に高い」と評価していることがわかる。「選本雖亦有所失[作品の選択には行き届かないところはあるにしても]」は『車中毒針』が探偵小説であることに不満を感

じていることを意味する。また漢訳の内容に踏み込まないから呉禱の白話訳がすばらしいことはわからない。

阿英は別に「翻訳史話」(1938/1981)<sup>\*5</sup>を書いてロシア文学の翻訳者として呉禱を紹介している。そこから作品などの部分を拾う。

「憂患余生」(1907。231頁)、『銀鈕碑』(1907)「訳文也是用白話所写成」(233頁)、芳草館主人『虚無覚真相』(1907。238頁。芳草館主人が呉禱であることを知らない)、「契訶夫之得來東土，也不能不感謝他的舌人吳禱」『黑衣教士』(1907。240頁)など。

呉禱が白話を使用したこと、またチェーホフを中国に紹介したことを阿英は賞賛する。それ以上に詳細は説明しない。「しない」というよりも説明「できない」のだ。なぜならば呉禱が底本としたのは日本語だからだ。阿英は日本語を理解しなかったから一歩踏み込むことができなかった。

琴子は義久に説得を続ける。というよりも琴子自身が決意したことを述べるのだ。

【柳浪】吉見さん、貴方御自分の御力をお信じなさらないこと。何様な艱難にでも打勝つて決心さへあれば、何にでも成つてくものだと私思つてますのよ。今後は貴方も私も保護者を失つたのだし、学資の給与者は無くなつたのだし、自分で働いて学問を為て行く外に道はありませんのよ。ねえ、そうでせう。私もう覚悟を極めたんですは。私は働らけるだけ働らいて、貴方の学資を拵へたいと、私覚悟を極めましたことよ。

85-86頁

【呉禱】吉見兄。你自己不能把定自己的心力。我想不論怎樣的艱難。只索決定心腸向前猛進。断没不成功之理。從今以後。我和你都是失了依賴保護的人。都是沒了学費。想来想去。除了自己劳苦做活去求学問。再没別法哪。可是咧。我已定下主意。拵著我

身儘有的力量。做那些劳役苦工的事。賺下錢来。将来做你的学費旅資。我是決定主意了。11頁

吉見さん、あなたはご自分の気力をお持ちではないの。どのような艱難でもただ決心して前に向かって猛進すれば成功しないはずがないと私は思っていますのよ。今後、私もあなたも頼れる保護者を失ったのですから学費もなくなりました。どう考えても自分で苦勞して働いて学問をするほかにありませんの。もうほかに方法はないんですわ。そうでしょう。私はもう考えを決めました。私の身を捨ててありったけの力をつくして苦しい仕事をしてお金を稼ぎそれであなたの学費旅費にしたいと私は考えを決めましたことよ。

呉禱漢訳において琴子は肉体労働をも厭わない。その必死な姿勢を明確に述べている。独身女性であれば実家に避難するという方法が普通はあるだろう。しかし琴子はそうではない別の道を歩こうというのだ。しかも自分で働いて恋人が学業を続けることできるように資金援助をしたいと申し出ている。こういう志を立てた女性が主人公だから呉禱漢訳の角書は「立志小説」である。琴子はまさに自立した女性として描かれている。同時期に似た筋の小説を呉禱は漢訳している。学費援助のために働く女性が登場する「新魔術」(『新世界小説社報』1906-07連載)であることを指摘しておく。

豊多摩郡田村の源兵衛村にタバコ屋が開かれた。主人は20歳前後の美人だ。境界の軍隊、学校に知られて店は繁盛した。「美人煙草」と呼ばれる所以である。

学生の大内、瀧山、金原らがタバコ屋美人の琴子に懸想する。琴子と一緒にいるのは召使の老女お友(阿友)だ。彼女が琴子についてありもしない経歴を学生に話すものだから誤解が生じて混乱する。さらに琴子自身がタバコ屋を開

いていることを義久に隠している。隠すことが義久にとってよいという琴子の考えだったのだろう。ところが秘密にすることで疑惑に転化してしまう。これが悪評を生じさせ美人煙草は地獄煙草店になった。後に琴子と義久の間にゴタゴタが持ち上がる原因である。やや不自然な設定だとは思う。だがその不自然さに成立している小説なのだ。

義久が卒業すれば琴子は借家をして家庭を持つことを考えていた。ところが義久と同期の金原という学生が琴子を見知っていた。彼女の素性が「美人萇のお琴 [美人煙草的阿琴]」異名を「お嬢お琴 [阿娘、阿琴]」という娼婦だと告げる。次は金原の言葉だ。

【柳浪】いや、人違ちやないか。僕は決して彼顔を忘れない、断言しても可い、確かに早稲田の奥に萇の店を出して居る、お嬢お琴と云ふ淫賣、110頁

【呉禱】呀。人必不錯。我再不忘了他的面相。確然在早稲田煙草店裏。名叫阿琴。是箇賣淫婦。54頁

呉禱の漢訳は「お嬢」を省略した以外は直訳になっている。

金原の理屈はこうだ。婦人の職業が増えており会社の書記でも日給50銭を得るのは容易ではない。普通は30、40銭の日給にすぎないのに琴子は義久に学資、下宿料、雑費小遣いまで十二分の資金を提供している。正当な職業であるわけがない。しかも琴子は仕事も住所も秘密にしている。よく考えてみるがいい。

卒業証書を持って義久は琴子の待つところに戻ってきた。金原を同道している。金原をみた琴子は顔色を変える。そら見ろ、琴子は僕(金原)を忘れずにいる。義久は金原の言葉を信じて琴子を罵る(下線は筆者)。

【柳浪】『穢れた婦人て、何人の事なの。』

と、琴子は口惜さに涙含みながら膝を進めた。

『貴女は其を問ふのか。』と、義久は涙含んだ眼に琴子を見据えて、『何人の事でもない、美人莫のお嬢お琴と云ふ醜業婦、』  
『えつ、醜業婦ですつて。』と、琴子は義久よりも金原を屹度見た。

『お琴さん、早稲田方面の学生間で、何人も知つて居る事実だからね。』114-115頁

【呉構】『卑汚的婦人。這是什麼人的東西』  
琴子。一時分辯不得。含著一包淒涼眼淚。  
雙膝跪在塵埃。那邊金原已是挿嘴。

『阿琴、姑娘。早稲田那邊學生們。任是誰也知道。可是真麼。』64頁

「けがれた婦人で誰の事なの」と琴子はしばらく何のことか分からなかった。悲しい涙を含みながら膝をちりの中にかがめた。そこに金原が口をはさんできた。

「お琴お嬢は早稲田方面の学生たちは誰でも知っている。本当だからね」

下線をほどこした日本語を呉構は漢訳しなかった。義久が琴子に「醜業婦」と直接投げかけることを避けた。婚約者がその単語を口にするのはあまりにやりすぎだと考えたものか。しかしここは義久自身から「醜業婦」という言葉を琴子に投げつけるところに衝撃度が増す個所だ。これがあって結末につながる。

義久に拒否された琴子は怨みのあまりに気を失い医者手に渡された。

結末はあまりにも突然にあっさりと訪れる。

義久が調べてみれば琴子についての醜聞はなかった。商売、住所を秘密にし義久を寄せ付けなかったのには理由がある。琴子を独身者と思わせて客の興味を引くための方法だった。お友(琴子の老召使)の発案である。それは当たってタバコ屋は繁盛していたのだ。さらに開店の資金は琴子の母親から最後の涙金として入手したものだとも知られた。

結末部分を引用する。義久に根拠のない悪評を吹き込んだ張本人の金原が関係している。

【柳浪】金原は容易く瀧山等の悪評を信じて、夫に盡せし琴子を陥れたのを慚愧する餘に深く琴子等に謝し、其罪を償はんが為に、更めて二人の中に立ちて月下氷人たらん事を乞うた。義久は琴子と旧盟を温めるに勿論異存はなかつたけれども、琴子は決然として謝絶して、一生独棲に終るべく決心したと云ふ事である。116頁

【呉構】金原呢。輕信那瀧山等人糟蹋人的歹話。無意中誣陷琴子。幾乎含了終身不白之冤。及至探聽分明。万分慚愧。再三向琴子賠禮。又因要贖取前罪。意欲介紹兩人之中。做箇現成月下冰人。使他們諧成鸞鳳。義久是不必說。願和琴子重締旧盟。再無二說。不料琴子因受這番羞辱。反倒回復斷絕。決定主意不願婚嫁。竟自終身守貞不字云。68頁

金原はといえば、あの瀧山らが人を侮辱する悪口を軽々しく信じ無意識に琴子を陥れほとんど一生晴らすことのできない冤罪を着せてしまった。ここに至り探って明らかになったため慚愧にたえず再三琴子にわびを入れその罪を償うためにふたりのなかを取り持ち媒酌人になって彼らを仲睦まじい夫婦にすることを欲した。義久は言うまでもなく琴子と前の約束を回復することを願うもう二言はないといったけれども、思いもかけず琴子はこのたびの侮辱を受けたことによりそれを拒み、嫁入りしたくないという考えを決め、とうとう一生操を守り嫁がなかったという。

上の引用を見るかぎり呉構の漢訳はほぼ原文に忠実なものとなっている。間違いがないというわけではない。煩雑なので注にまとめた\*6。しかし多くはないことをいっておく。

呉禱がすぐれているひとつは柳浪の「美人莧」という作品を選んだことだ。主人公の琴子は男性に尽くし奉仕する女性である。いかにも旧来の女性のようなのだが基本的に違う側面がある。すなわち琴子は職業を持ち経済的に自立する女性であることだ。柳浪は明治時代という状況も織り込んだ。当時の女性がひとりで自活するためには職業の選択が多くなかった。極端なばあいは娼婦に直結する。その背景があるから学生たちが美人タバコ屋琴子のことを噂し悪評を広めたのだ。尽くした男性に裏切られる。信じてもらうことのできない悔しさに卒倒するほかない。しかし許す一線を越えた男性に対してひとりの女性として断固と拒絶する姿勢を示す。明治時代に生きるひとりの新しい女性を活写している。

もうひとつの特色は漢訳が白話文(口語)であることだ。前述したように白話が提唱される以前から実践していたのが呉禱だった。そこを無視してはならない。 ㊦

6) 誤解あるいは改変がある。

【柳浪】大内は勧められるまゝ腰を卸して、／『其敷島を一袋貰はう。』／『はい。』と、老女は莧の敷島を取つて遣る、／『剰余はお前に上げるよ。』／『どうも度々済みませんね。』と、老女は二十銭銀貨を押載いて、直ぐに奥へ行つたが、98頁

【呉禱】大内答応著。坐了下去。開口問。『可有敷島煙麼。給我一支則箇[それを1本くれ。]』／老婦答道。『是。』隨取幾支遞給過去。大内接了。將剩下的仍給老婦道。／『這餘下的奉送与你。』／老婦隨向裏面而行。23-24頁

タバコ「敷島」1箱を呉禱はバラ売り1本と漢訳する。中国の風習に合わせたのかどうかはわからない。「二十銭銀貨」を省略した。

金原が義久にあてた「端書(はがき)」(102頁)を「一封郵便」(35頁)と書き換えた。

省略がある。柳浪「思や限なし、逢や果しなし、のぼる恋路に峠なし」(106頁)を呉禱は漢訳しなかった。「峠」は日本国字だから訳しようもない。



【注】

1) 参考文献。

樽本照雄「いくたびかの阿英目録6」『清末小説から』第114号 2014.7.1

樽本「清末翻訳小説雑考——いくたびかの阿英目録(選)」『清末翻訳小説論集(増補版)』清末小説研究会2017.1.15

樽本「自爆する日中の研究者たち1——清末小説と林訳をめぐって」『清末小説から』第130号 2018.7.1

2) 寅半生「小説閑評」『遊戯世界』第1-18期 一部初出未見。阿英編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究巻』北京・中華書局1960.3上海第1次印刷。台湾・文豊出版公司1989.4影印本

3) 次を参照した。伊狩章編「年譜」『明治文学全集』19「広津柳浪集」筑摩書房1965.5.10。また『日本近代文学大事典』第3巻144-146頁

4) 田山花袋『東京の三十年』岩波文庫1981.5.18

5) 阿英「翻訳史話」『小説四談』上海古籍出版社1981.12。末尾に1938年とある。

蘇 湛○科普伝統与中国科幻共同体的演变『中国現代文学研究叢刊』2021年第8期(総第265期) 2021. 8. 15

李 春○翻訳与重写的“知識”如何啓蒙?——《泰西歴史演義》の生成与価値『中国現代文学研究叢刊』2021年第8期(総第265期) 2021. 8. 15

譚 望○伝播学視野下張恨水与鴛鴦派關係再辨析『中国現代文学研究叢刊』2021年第9期(総第266期) 2021. 9. 15

張 劭○清末民初社会小説考辨——以小説類型研究為視角『中国現代文学研究叢刊』2021年第9期(総第266期) 2021. 9. 15

次号の公開は2022年4月1日を予定しています

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

## 关于吴棣译《偵探小説 虛無黨真相》的 底本及其他

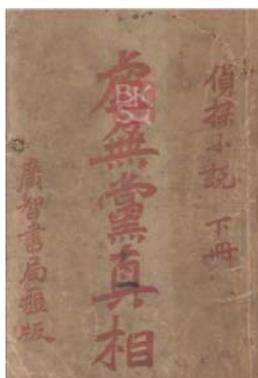
梁 艳

已经获得了学界的认可。然而，关于他的生平，包括生卒年月、家庭环境、成长经历、教育背景、是否有留日经历，等等，至今还是一个迷。日本学者樽本照雄曾以泽本香子的笔名发表过一篇题为《关于书法家吴棣》（「書家としての吳棣」『清末小説』第32号、2009.12.1）的论文。他在文中以确凿的史料证实吴棣不仅是一位翻译家，而且还是清末民初时期一位非常出名的书法家，室名“天涯芳草馆主”。沿着这条线索，樽本继而发现了吴棣以“天涯芳草”、“芳草馆主人”、“天涯芳草馆主亶中”为笔名发表的4篇翻译作品<sup>1</sup>。长篇小说《偵探小説 虛無黨真相》便是其中的一种。

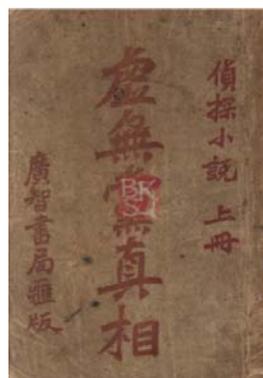
吴棣在中国近代翻译文学史上的地位和贡献，



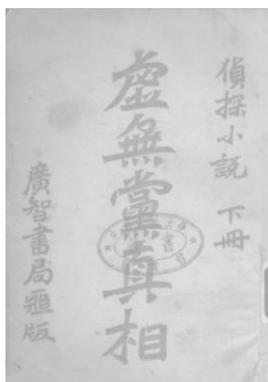
《偵探小説 虛無黨真相》初版<sup>2</sup>封底



《偵探小説 虛無黨真相》(上、下冊)初版封面



《偵探小説 虛無黨真相》再版<sup>3</sup>封底



《偵探小説 虛無黨真相》(上、下冊)再版封面



<sup>1</sup> 沢本香子「書家としての吳棣」（『清末小説』第32号、2009.12.1），第107页。

<sup>2</sup> 初版本图片来自《全国报刊索引》，为上海图书馆藏书。

<sup>3</sup> 再版本图片来自CADAL（大学数字图书馆国际合作计划），为中国人民大学藏书。

《偵探小説虚无党真相》共两册，初版于光绪33（1907）年11月由广智书局发行，后于光绪34年六月朔日（1908.6.29）再版。如上图版权页可知，该小说的著作者为“德国摩哈孙”，重译者为“中国芳草馆主人”（即吴棹），评订者为“披发头陀”。

该小说的封面虽然明确标注为“侦探小说”，但是其内容涉及俄国虚无党，并且主标题中的“虚无党”三个字赫然醒目，因此也可以视为虚无党小说。该小说篇幅较长，在众多虚无党小说中属于大部头的作品。正因为如此，迄今为止学界但凡论及此类小说的翻译，一般都会提及《偵探小説虚无党真相》，并将其视为非常重要的代表作品<sup>4</sup>。不过，关于“重译者中国芳草馆主人”是谁，在2009年樽本照雄考证出是吴棹之前，学界并不知道这位译者的真实身份。目前，关于这部小说的基础情况，尚有多个扑朔迷离的问题未能澄清。比如，它的原作者、评订者到底是谁？它的底本是什么？这些问题都有待考证。

关于“评订者披发头陀”，可以从1907年12月30日《时报》上刊登的一则广告中找到一些线索。

此书专叙虚无党事，凡一百零六章，都十三万余言。自来言虚无党内情无有详于是书者。书为德国摩哈孙著，日人译出东文，今由天涯芳草馆主人译成汉文，而**披发生**润色加评，条达华瞻，不愧名作。至其事迹，尤引人入胜。全书以学生为经，党人为纬，又以两奇女及娘子军渲染之。或则智计绝伦，或则柔情如海，可歌可泣，愈

愈奇。其描摹官吏腐败、社会黑暗处，更可作吾国前车之鉴。<sup>5</sup>

此广告指出润色加评之人为“披发生”。这提示我们一个信息，即“披发头陀”=“披发生”。“披发头陀”是谁虽然不清楚，但“披发生”这个人，能够立即锁定。他就是“康门十三太保”之一、大名鼎鼎的康有为嫡传弟子罗普。罗普不仅以“披发生”的笔名翻译过《离魂病》、《白丝线》等小说，还以“羽衣女士”为笔名发表了《历史小说东欧女豪杰》（《新小说》1-5号，1902年11月14日-1903年7月9日）。《东欧女豪杰》被视为中国最早的“虚无党”小说，叙述了俄国虚无党的革命活动，塑造了苏菲亚这一女英雄的光辉形象。据考证，罗普在创作时有一部分曾参考日本川島忠之助翻译的《虚無党退治奇談》（原作：PAUL VERNIER: LA CHASSE AUX NIHILISTES.）<sup>6</sup>。从罗普的虚无党小说写作背景来推断，他为吴棹译《偵探小説虚无党真相》作点评是很合适的。另外，罗普曾担任《时报》的总主笔，加之上述《时报》广告是在《偵探小説虚无党真相》正式出版后不久发布的，因此其中所透露的信息可靠性较强。鉴于上述原因，笔者认为“披发头陀”应该就是“披发生”罗普。

上述广告还指出，该小说是从日译本转译的。这很符合吴棹的底本选择策略。纵观吴棹的所有翻译作品，都是通过日文转译的，并且他会写明为“重译”，亦即“转译”的意思。《偵探小説虚无党真相》的版权页标注方式，与吴棹的一贯做法相

<sup>4</sup> 如，阿英在《第三回 虚无美人款款西去 黑衣教士施施东来》中指出：“其次有芳草馆主人所译之《虚无党真相》（一九〇七），凡二巨册”（见《小说四谈》上海：上海古籍出版社，1981年，第238页）；陈建华在《“虚无党小说”：清末特殊的译介现象》中指出：“其中影响较大的有……《虚无党真相》……等”（见《华东师范大学学报（哲学社会科学版）》，1996年第4期，第68页）；郭延礼指出：“近代又形成了另一股

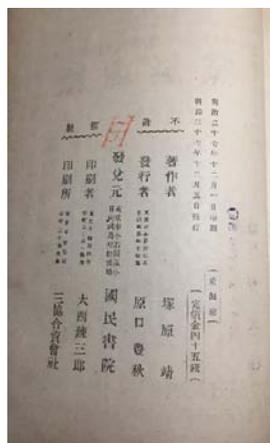
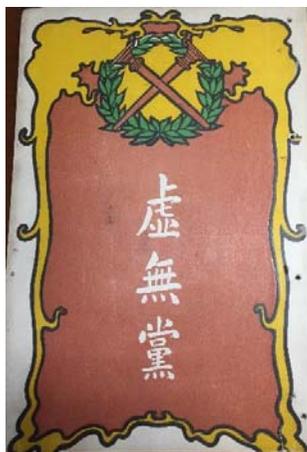
翻译虚无党小说热，……这类代表性的小说译作有……芳草馆主人译的德国摩哈孙的《虚无党真相》（1907）”（见《中国近代翻译文学概论》武汉：湖北教育出版社，1998年，第111页）。

<sup>5</sup> 《广智书局新出小说：虚无党真相》，《时报》1907年12月30日，第1版

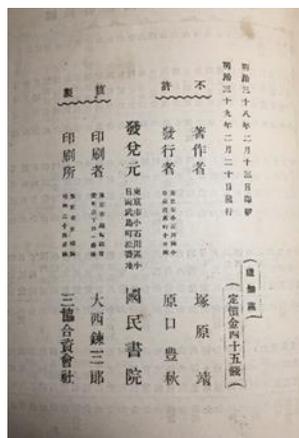
<sup>6</sup> 中村忠行：「晚清に於ける虚無党小説」，《『天理大学学報』1973年第24卷第5期。

一致。那么，这部小说的日文底本是什么呢？由于这部小说分上下两册，篇幅较长，所以很可能是根据单行本翻译的。于是，笔者首先查阅了相关先行研究，了解明治时期日本出版了哪些虚无党小说，从而寻找线索进行辨析。在这个过程中，中村忠行的论文「晚清に於ける虚無党小説」（『天理大学学报』1973年第24卷第5期）给了笔者很大的启发。该论文第147-148页，列举了一些明治三十年代发表的虚无党小说。其中，塚原

涩柿园的《虚無党》和《続虚無党》因题目和篇幅与《<sup>偵探小説</sup>虚無党真相》相近，所以引起了笔者的注意。几经查阅，笔者在日本的古书网上购得了这两本书。将其与吴棹的译文进行比较，可以确认《<sup>偵探小説</sup>虚無党真相》的底本就是塚原涩柿园所著《虚無党》（国民書院、明治37（1904）年12月5日）和《続虚無党》（国民書院、明治39（1906）年2月20日）<sup>7</sup>。



（塚原涩柿园著《虚無党》封面、扉页、版权页<sup>8</sup>）



（塚原涩柿园著《続虚無党》封面、扉页、版权页）

<sup>7</sup> 该小说起初曾在《东京日日新闻》（明治37年2月9日至6月6日）上连载。不过，考虑到单行本流通性强，方便保存，笔者认为吴棹在翻译这种大部头的作品时，以单行本为底本的可能性最大。

<sup>8</sup> 塚原涩柿园著《虚無党》、《续虚无党》为笔者所藏，本文所用图片（封面、扉页、版权页、广告）均为笔者拍摄。

以下将两种小说的开头和结尾列出，以便对比验证。

<p><b>塚原涇柿園著『虚無党』第一回摘录</b></p> <p>莫斯科府の郊外の競馬場の土堤際に、四五人の人影が、暮夢林の塔を掠めて上ぼる月の光を斜に浴びて、唾の家鴨が寝牀でも争さうやうに、互ひに頸を交へて蠢動いて居る。其の人達は廿一二から四五までの壮盛り。衣服の仕立から襟に閃かる徽章をもて之を察すると、當所の工科大学の生徒であるらしい。いづれも酒気は帯びてゐるが、其の酔を殺して、暗に何者をか待つあるものの如き體で、持って居る杖で音のせぬ様そこらの小石を叩きながら、一人は凭う云つた。「江戸田、もう何時になる？」江戸田と呼ばれた若い男は、其れが不審な様な面色で、「何時になるって。貴様時計は？」(第1-2頁)</p>	<p><b>吴棹译《<small>偵探小説</small>虚无党真相》上册第一章摘录</b></p> <p>墨斯科城外跑马场上土堤边，忽有四五个人影。那时璧月初出，斜掠那克林林塔，渐渐上升。池里的家鸭子，大家交颈，哑哑的叫着乱动！这一群人，都是二十余岁的壮盛少年。看他衣襟上，一律悬着闪烁辉煌的徽章，就知是本地工科大学校学生。却个个带着酒气，醉容可掬。原来他们闪在暗中，不知在那里等待什么人似的，将手中拿着的木杖，不住的敲那堤旁小石块儿。内中一个说道：“夏特达君，你看这会儿是什么时候了？”那边一个想必就是名叫夏特达的，脸上现出疑惑不决的样子，答道：“什么时候？我也不知。请看老兄的时表。”(第1頁)</p>
<p><b>塚原涇柿園著『続虚無党』最后一回摘录</b></p> <p>御手函の中より取り出さるるは一個の金時計！不審と見れば、其は彼の怒白杵が、不義の穢光を其胸間に輝かして、彼れ葦野が常に遺恨の眼眦をもて疾視へたる其の其物である。此程贓品として出でたるを、皇は侍臣をして購求はさせて、扱て今日の恩賜。不正の色は此時に全然失せて、今は翻って孝子が名誉の勲章とも其の光輝を表示するのであった。此時に又た内旨あり、征矢をば、大僧正陳高義が真正の姪として、葦野に下さる。又た彼の假名は思ひ思うた互ひの夫婦中、能生五郎一へ。いづれも宮中にての御媒酌。年まだ立たぬ暮の中から、めでたき春は、別て此の嬉しき二夫婦の身上に来たのである。(第211-212頁)</p>	<p><b>吴棹译《<small>偵探小説</small>虚无党真相》下册最后一章摘录</b></p> <p>说罢，便递过这一件东西来。谁知是一扣金时表。原来正是那杜士基悬挂胸前，露出不忠不义的光辉，阿希那见了常常含悲隐恨、目眦欲裂的那件东西。如今人人知是卖国贼物。俄皇特命侍臣设法购来，恰好做了今日的恩赏哈！说也可怪，这时候那时表上不正的颜色，全然失去，已变成孝子有名誉的勋章，放出那辉煌灿烂之色……此时又有内旨，苏雅既是愿嫁本国人，今特赐与阿希那为妻。那葛娜本来早有成约许嫁那普哥罗。如今两对玉人，都是宫中主的媒妁，好不荣耀，好不美满……时方岁暮，腊尽春回，只觉得一片春光，归到他两对儿新夫妇身上，最先最早。(第240-241頁)</p>

通过上述两段对比，可以看出吴棹的翻译比较忠实于日文底本，他使用较为纯熟的白话，通俗易懂。但是，也有一个最大的不同，就是人名、地名的翻译差异较大。如，“暮夢林の塔(クレムリンのたふ)”译为“克林林塔”，“江戸田(えどだ)”译为“夏特达”，“怒白杵(どうす

き)”译为“杜士基”，“葦野(あしの)”译为“阿希那”，“征矢(そや)”译为“苏雅”，“假名(かな)”译为“葛娜”，“能生五郎一(のぶごろいち)”译为“那普哥罗”，等等。明显可以看出，吴棹是根据人名、地名的日文注音假名来选择发音相近的汉字译成的。人名翻译方面，他选择汉字时比较注重将日本姓氏改为中国人常见

的姓氏,比如“夏”、“杜”、“苏”、“葛”、“那”。并且,“苏雅”和“葛娜”一看就是女性的名字,不像日文底本中的“征矢”、“假名”,只看汉字的话,不知是男是女,容易产生歧义。吴棹将人物姓氏中国化,有助于读者记忆。不过,这些名字整体读起来,并不像中国人,而更像西方人。这其实比较符合小说的背景设定,不会因为姓名而引发中国读者对小说人物的错误联想。

吴棹的翻译还有一点与底本不同,就是回数的标注不同。塚原涩柿园作《虚无党》共54回,《续虚无党》共52回,合计106回。每回用序号标注(一)、(二)、(三)……(五十二)(五十三)(五十四)。《续虚无党》的回数不续接《虚无党》,重新从第1回开始标至第52回。吴棹译本上下两册回数连续,下册第一回接着上册的最后一回(第五十四章)标为“第五十五章”,一直到结束总共106回,标“第一百零六章”。

日文底本的作者塚原涩柿园(1848-1917)是日本明治时期的报人、小说家、翻译家。本名靖(しずむ),笔名有寥洲、志かま、十四庵、纵死、自由思园、时迂叟等。青少年时期曾在沼津兵学校、静岡医学校、浅间下集学所学习洋学。1874年进入《横滨每日新闻》工作,1878年结识

报人福地櫻痴,后转入《东京日日新闻》任编辑。他撰写的剧评曾是该报的一大招牌,很受欢迎。此后,他又开始翻译、创作小说。翻译作品有《鲁国事情》(1873)、《昆太利物语》(1887)、《曼府の叛乱》(1887)《半島の戦争》(1888)、《凯法苦士》(1888)等。政治小说《条约改正》(1889)、《人造洪水》(1893)、社会主义小说《虚无党》(1904)等陆续发表后,好评如潮,他一跃成为与《万朝报》的黑岩泪香齐名的报刊小说家。1892年6月-8月,《东京日日新闻》连载了他的第一部历史小说《讨敌净琉璃坂》,此后一发不可收拾,又发表了《北条早云》(1895)、《伊达政宗》(1897)、《伏见宫殿下》(1904)、《大石良雄》(1906-1907)、《天草一揆》(1907)、《由井正雪》(1907)、《木村重成》(1907)、《侠足袋》(1909)等数量众多的作品,被誉为“明治历史小说集大成者”。1904年日俄战争爆发后,塚原涩柿园加入了《东京日日新闻》的战地视察团,6月12日启程,由佐世保出发到达仁川,途经京城、南浦、平壤、三和,到达了鸭绿江口,途中曾谒见韩帝。此次出行,他撰写了「三十日記」(『東京日日新聞』、明治37(1904)年6月16日-7月27日)和「三十日余りの記」(『東京日日

(广告1)



(广告2)



(广告3)



(\*广告1、2见塚原涩柿园著《虚无党》,广告3见塚原涩柿园著《续虚无党》)

新聞』、明治37(1904)年7月28日)<sup>9</sup>。

他创作的《虚無党》最初于明治37年2月9日至6月6日连载在《东京日日新闻》上。连载开始的时间正是日俄战争刚刚爆发之后，连载结束的时间恰好又是他前往中国战场之前。该小说的大背景就是日俄战争，出场人物既有日本人也有俄国人。国民书院于明治37年12月5日出版了《虚無党》的单行本。原来预计于同年12月中旬再出版《续虚無党》的单行本(见广告1)，但不知道什么原因，最终《续虚無党》正式发行已经是明治39年2月20日了。从单行本发行时的广告词“好评啧啧再版”(见广告3)来看，这部小说当时在日本有一定的人气。想必其受欢迎的原因就在于塚原涩柿园抓住了民众关注的时事热点，《虚無党》的内容迎合了当时日本大众想了解日俄战争的心理和需求。

最后，关于“著作者德国摩哈孙”一事，笔者想做一点说明。吴棹译本中除了在版权页对著作者进行了标注以外，披发头陀给《偵探小説虚無党真相》所做的眉批中，也有两处提及：

1	<p><b>著者原是日本人，故极力写此叔父，以贬抑俄人</b>，阅者不可不知。</p> <p>(见《<small>偵探小説</small>虚無党真相》上册第十一章，第42页)</p>
2	<p><b>此书本是德国摩哈孙著，而日本某小说家译出者。是时日俄战务旁午，故书中时时涉及，其为日人点竄，固无疑义。其中诋毁过甚之辞，亦属不少。</b>读者分别观之可也。</p> <p>(见《<small>偵探小説</small>虚無党真相》下册第一百零六</p>

章，第240页)
----------

上册第11章中说著者是日本人，到了下册最后一章小说即将结束时，又特地解释说原作者是德国摩哈孙，有关日俄战争的内容是日本译者对原作进行的改写。想必这就是《时报》广告称其“书为德国摩哈孙著，日人译出东文”<sup>10</sup>的依据。

然而，从日文底本《虚無党》、《续虚無党》的封面、扉页、版权页乃至广告中的标注来看，都明确写着塚原涩柿园是该小说的著作者。虽然日文底本里面的插图人物都是西方装扮，但是目前没有找到任何信息能够说明这部小说是塚原根据德国作家摩哈孙的作品翻译的<sup>11</sup>。此外，日本研究者也将《虚無党》、《续虚無党》归类为“著作”<sup>12</sup>。因此，虽然吴棹译《偵探小説虚無党真相》的版权页写着“著作者德国摩哈孙”，但是笔者十分怀疑是否真的有这样一位德国作家。

吴棹的不少翻译作品，版权页都会以日文底本为依据，原原本本地标注著译者信息，并且一般都比较准确。这在翻译规约尚未形成、许多译作都缺少相关信息的晚清时期，是非常特别的做法。例如，他翻译的《山家奇遇》中便写明：“马克多槐音著，日本抱一庵主人译，钱塘吴棹重演”<sup>13</sup>。以此为根据，可以比较容易地辨别出著者为马克·吐温、日文译者是原抱一庵。同时，吴棹自己的名字也是真实的，而非笔名。再如，他经由日文转译的德国作家赫尔曼·苏德曼(1857-1928, Hermann Sudermann)的小说《卖国奴》中也写着日本译者和自己的真实姓名：“原译者日本登张竹风，重译者杭县吴棹”<sup>14</sup>。然而，在《偵探小説虚無党真相》中，译者吴棹和评

<sup>9</sup> 大塚豊子：「塚原渋柿園」//昭和女子大学近代文学研究室著：『近代文学研究叢書 第17巻』，昭和女子大学光葉会，1961年，第225页。

<sup>10</sup> 《广智书局新出小说：虚無党真相》，《时报》1907年12月30日，第1版。

<sup>11</sup> 笔者未见该小说在《东京日日新闻》上连载的版本，不知该报上是否有关于原作者的说明。

<sup>12</sup> 大塚豊子：「塚原渋柿園」//昭和女子大学近代文学研究室著：『近代文学研究叢書 第17巻』，昭和女子大学光葉会，1961年，第234页。

<sup>13</sup> 见《绣像小说》第70期所载《山家奇遇》首页。

<sup>14</sup> 见吴棹译《卖国奴》(上海商务印书馆，中华民国3(1914)年4月再版)版权页。

订者都没有留下真实姓名，而是标注了笔名。虽然版权页写着“重译”，但是并没有写明日本译者的信息。这与吴棹的一贯做法有所违背。

其实，吴棹翻译的《裁判小説博浪椎》与《偵探小説虚无党真相》在著译者署名方面存在相似的问题。《裁判小説博浪椎》在《竞立社小说月报》上连载时标注：“法国雷科著，天涯芳草译”<sup>15</sup>，后改名为《棠花怨》出版单行本时则改为：“法国雷科著，中国天涯芳草馆主海阳吴棹宣中译”<sup>16</sup>。据说，该小说的原作者是英国作家乔治·曼维尔·芬恩（George Manville Fenn, 1831-1909），吴棹是根据黑岩泪香的日译本《梅花郎》（明进堂，1890）转译的，原作目前尚不清楚<sup>17</sup>。那么，吴棹是怎样将原著者标注为“法国雷科”的呢？樽本照雄指出，“雷科（leike）”的汉语发音与日本翻译家黑岩泪香的名字——涙香（るみかう）的日文发音相近，是吴棹将日本人的名字通过音译的方法改造成了法国人的名字<sup>18</sup>。黑岩泪香在日译本中并没有写明原作是什么，但是标注了“涙香小史譯述”的字样，因此吴棹应该知道这是一部译作。鉴于小说故事的发生地在法国，于是吴棹便臆测其原作者是法国作家，因此便有了“法国雷科”的记载。这提醒我们，在无法判明原作者时，出于某种目的，吴棹也会进行一定的编造。

既然如此，那么“著作者德国摩哈孙”也很有可能是捏造出来的作家。如果事实果真如此，那么其背后的原因和动机将是一个值得深入探讨的有趣话题。笔者在此姑且提出一点不成熟的看法。吴棹翻译《偵探小説虚无党真相》的1907年前后，正是中国立宪运动蓬勃发展的时期，也是以秋瑾、徐锡麟事件为典型的暗杀活动频频发生的时期。

这与《偵探小説虚无党真相》中写到的俄国政府的暴政、官员的腐败、虚无党的活动、日俄战争的情况以及立宪制度的确立等形成了某种互文关系。正如《时报》广告所言，这部小说可以为中国提供前车之鉴。但是，通篇译文中看不出吴棹的任何观点。反倒是立宪派代表人物、评订人罗普（披发头陀）常常在眉批中提示中国读者通过相关情节进行思考、学习。在翻译作品中很少添加批注、附言，不在小说中袒露自己的意见和主张，是吴棹的一贯做法。这与同时代的翻译家陈景韩形成了鲜明的对照。纵观吴棹的所有译作，总给人一种为文学而翻译之感。有关吴棹生平的资料很少，他是否参与过某些政治活动，目前尚不清楚。但是，隐隐让人觉得他是一个疏远政治之人。如果是这样，那么他翻译这样一部涉及政治问题较多的小说，可能是有难言之隐。说不定是为了生存和经济问题，而接受了立宪派指定的翻译任务。如前文所述，译文最后一回补充说明原作者为“德国摩哈孙”的是评订人“披发头陀”。因此，如果“德国摩哈孙”是伪造的，那也很可能是评订人所为。身为译者的吴棹，既然是为了完成任务，想必也不愿署自己的真实姓名<sup>19</sup>，更不介意将原作伪装成德国作品。说不定还能藉此吸引读者的眼球，避免一些不必要的麻烦，何乐而不为呢！

以上关于《偵探小説虚无党真相》的观点，因所见资料有限，不乏许多臆测，在此恳请学界同仁批评赐教。 □

本文系国家社科基金青年项目“中国近代翻译文学中的日文转译现象研究（1898-1919）”（15CWW007）、国家社科基金重大项目“近代以来中日文学关系研究与文献整理（1870-2000）”（17ZDA277）的阶段性成果。

（作者单位：同济大学外国语学院）

<sup>15</sup> 见《竞立社小说月报》第1期（光绪33年9月28日）所载《裁判小説 博浪椎》第1页。

<sup>16</sup> 见《裁判小説 棠花怨》（上海商务印书馆，光绪34年11月）第1页。

<sup>17</sup> 樽本照雄编：《清末民初小说目录（第13版）》，清末小说研究会，2021年，第4671页。

<sup>18</sup> 见清末小说研究会主页：<http://shinmatsu.main.jp/>，2021年6月9日条目。

<sup>19</sup> 吴棹署名“天涯芳草”创作的《札记小説 开国会》（《竞立社小说月报》第2期，光绪33年10月24日）是关于国会选举的。由此推测，涉及政治问题的作品他不愿留下自己的真实姓名。

林訳『俄宮秘史』の原作・補記

沢本 郁馬

林訳『俄宮秘史』の原作

林訳『俄宮秘史』の原作はすでに明らかにされている。

馬泰来「林紓翻訳作品原著補考」(『清末小説』第16号 1993.12.1)には次のように書いてある。ご覧いただきたい。



137. 《俄宮秘史》(The Secret Life of the Ex-Tsaritza. 1918)

英国魁特(William Le Queux, 1864-1927)原著, 陳家麟同訳。上海・商務印書館, 民国十年(1921)五月。(林訳原誤魁氏為法人。) 117頁

著者はイギリスのル・キュー、書名は『ロシア前皇后の秘密生活』という。

不明であった原作を特定したのがよい。また林訳がル・キューを誤ってフランス人としたと指摘している。だから冒頭でイギリスと明記した。馬泰来の記述が正しい。

以上をふまえて以下は私の備忘録の補足である。

魁特の理由

まず簡単なところから説明する。ル・キューが林訳では魁特と表記される理由だ。特別な漢字のならばであって林訳以外には見かけない。

人名について多様な漢訳表記があふれている。当時の翻訳界にありがちなことだろう。

WILLIAM TUFNELL LE QUEUX を漢訳すれば以下ようになって出てきた。似たようなものに私が分類する。

- 葛威廉、葛維廉、
- 惠霖芳克、慧霖芳克、
- 威廉辣苟、威廉勒苟、威廉盧鳩、威林樂幹、
- 維廉鳩、維廉勒鳩氏、維廉勒格、維廉勒苟、
- 維廉勒鳩、維廉勒蒯、威維立克、
- 惠廉奎克士、惠廉奎克士、威連勒格克司、
- 威廉規克斯、威連勒格克司、
- 衛梨雅、勒克維廉、圭克士、威廉喬利亞斯

これほどまでに多様だ。多くの作品が別々の訳者によって漢訳された証拠でもある。以上の表記は基本的にウィリアムとル・キューの組み合わせであることが一目瞭然だろう。

ウィリアムはとりあえずおいておく。ル(LE)に辣、勒、盧、樂などを当てる。発音が近い。キュー(QUEUX)が葛、苟、勾、鳩、幹、格、蒯などになるのは理解の範囲内だ。ただし奎克士、格克司、規克斯などは英文綴りのままに読んだらしい。喬利亜斯の前に威廉がついている。ならばル・キューが喬利亜斯に相当するだろう。だが音読すると別物に聞こえる。どうしてそうなるのか不明である。

林訳のばあいは QUEUX を「魁」にした。「特」は WILLIAM TUFNELL LE QUEUX の タフネル(TUFNELL)を漢訳したもの。カタカナで示せばキュー・タフネルの順になる。タフネルを漢訳したのは上の翻訳群には見ることができない。しかも林紘が陳家麟と共に訳したル・キュー作品はこの『俄宮秘史』1作だけだ。

### 原作者の国籍

林訳に表示された原作者の国籍が違っているものがある。細かいことだ。国籍はわざわざ書かなくてもいいようなものだが当時の習慣では表示していた。間違いも生じるだろう。

林訳にみえる間違った例を示す。簡易表記をして「ママ」と示したのが実物だ。矢印で正しいものと原作者名を参考までに掲げておく。気にする研究者もいるから念のためだ。

(英<sup>??</sup>) 鎖司倭司女士著→アメリカ Emma Dorothy Eliza Nevitte Southworth (1819-99)

(法<sup>??</sup>) 男爵夫人阿克西著→イギリス Baroness Emma Magdolna Rozália Mária Jozefa Borbála "Emmuska" Orczy de Orci (1865-1947)

(法<sup>??</sup>) 亜波倭得著→イギリス George Allen Upward (1863-1926)

(徳<sup>??</sup>) 伊ト森著→ノルウェー Henrik Johan Ibsen (1828-1906)

(英<sup>??</sup>) 亜丁編輯→アメリカ William Livingston Alden (1837-1908)

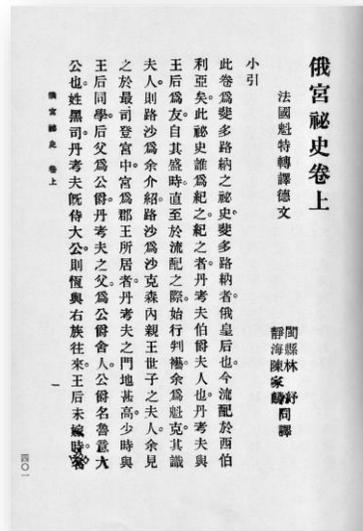
林訳がイブセンをなぜドイツ人にしたのか理由はわからない。林訳以前に那威、挪威、璫威と表示するものが刊行されている。それは参考にしなかったらしい。底本にしたのがデル(Draycot M. Dell)の小説化英語本だ。イブセンは間接的なものだから意識されなかったものか。ここをつかまれて林紘はイブセンの国籍すら間違うほど無知だと攻撃されることになった。よく知られている事実のひとつだ。

どのみち共訳者の毛文鍾が責任を負うべきだろう。林紘は外国語を理解しなかったから原作者の国籍については共訳者の意見に左右されたはずだ。

### 馬泰來の探究と樽目録の対応

ル・キューの国籍については以上のとおりすでに解決している。馬泰來の前出論文に指摘があるとおりだ。

林訳『俄宮秘史』には「法国魁特転訳徳文」と記述する(後述)。



くり返すがそれについて馬泰來は「林訳ではル・キューをフランス人だと誤る[林訳原誤魁氏為法人]」と念をいれて書いているのだ。さ

らに説明して次のとおり。「ル・キューは実はイギリス人である。作品は清末民初において漢訳は少なくない。作者の訳名はけっして統一されているわけではなく……(中略:名前漢訳の例を複数あげる)……、しかしフランス人と誤るものはない。陳家麟の無学であることの一例である[按魁特實爲英人, 作品清末民初漢訳不少, 作者訳名並不統一, ……、但未有誤爲法人者。陳家麟之不学, 此又一例]」(馬泰来「林紓翻譯作品原著補考」『清末小説』第16号 1993.12.1. 117頁)

馬泰来がわざわざそう説明したのは理由がある。彼は過去においてル・キューをフランス人にしてきたからだ(後述するが付建舟が知っているのは以前の段階まで。後の訂正を見ていない)。

馬泰来「林紓翻譯作品全目」(錢鍾書等著『林紓的翻譯』北京・商務印書館1981.11)である。林訳が「法国」と書いているのをそのまま受け入れた。

というわけで該訳作をフランス作品に分類しユゴーの前に配置した[泰来137]。魁特のままに示し原作者名ル・キューも原作についても不記だ。ただ「疑據英訳本重訳」とのみ説明している。

以上の説明から1981年時点でル・キューについて馬泰来ははっきりとは把握していなかったということが推測できる。

12年後の1993年に「補考」を書いて前出のとおりル・キューをイギリス人に訂正しその原作を特定し公表したという流れである。

『清末民初小説目録』では最新研究成果を収録するように努めている。馬泰来による原作特定は樽目録第3版(2002 中国)にも記載している。ただしそれだけでは不十分だと考えた。ゆえに樽目録第6版(2014 電字版 ウェブ公開非売品)よりル・キューをフランス人とするのは誤りだと馬泰来を引用して明記することにした。ウェブ公開だから見ている人は利用してい

るだろう。見ていないばあい私の方からはなにもできない。

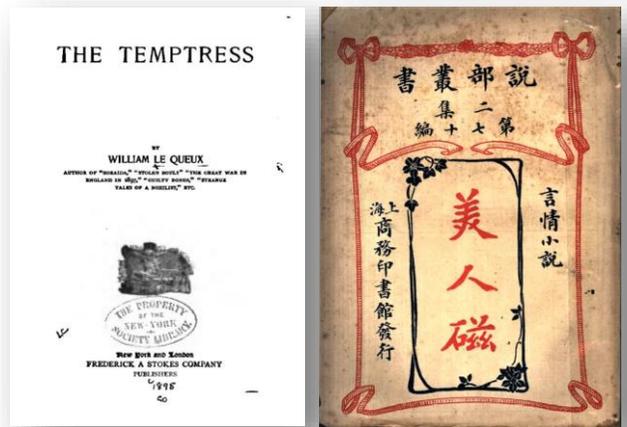
### 付建舟の記述

ル・キューについて当時の漢訳ではイギリス人とするのが圧倒的に多い。ただし一部にフランス、ロシア(1例のみ)の表示があることはある。

その少ないフランス表記3種類のひとつが次の作品だ。

(法) 威廉規克斯著、商務印書館訳『(言情小説) 美人磁』商務印書館 光緒34(1908)

いままで原作は不明であった。いい機会だから明らかにする。原作は WILLIAM LE QUEUX “THE TEMPTRESS” (1895) である (project gutenberg 所収)。



該漢訳には新訳(1908)、小本小説(1915)、説部叢書(1915)の3種類が刊行された。ここでは付建舟の著作から説明を紹介したい。といっても付建舟の著作は多い。ル・キュー原作に言及している以下の3種類を見る。

付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』杭州・浙江工商大学出版社2013.1。略号は[付二]

付建舟『清末民初小説版本経眼録・俄国小説卷』北京・中国致公出版社2015.1。略号は〔付俄〕

付建舟『商務印書館《説部叢書》叙録』北京・中国社会科学出版社2019.8。『叙録』と称する。略号は〔付説〕

並べると彼の知識の蓄積状況がわかるかもしれない。

〔付二27〕写真あり。表紙は「社会小説／新訳／美人磁／商務印書館」、奥付は原著者：法国威廉規克斯、編訳者：商務印書館編訳所、総発行所：上海・商務印書館、光緒三十四年七月初版」、36回162頁1冊

写真を掲載しているのがよい。ただし上の時点では「法国威廉規克斯著述」と説明しているだけだ。原作者についての知識はなかったらしい。馬泰来が『俄宮秘史』に関してル・キューを指摘したのは1993年のことだった。しかし付建舟は上記著作の2013年時点で馬泰来論文があることに気づいていない。日本の『清末小説』に掲載された論文だから読んでいないのだろう。情報の伝達に時間差が生じるのはしかたのないことだ。

次の著作〔付説326〕において同じ写真を掲げながら説明に変化をつけた。原作者の英文綴りを明記している。

〔付説326〕原著者威廉規克斯是法国作家 William Le Queux (1864-1927), 参見《重臣傾国記》。

原作者威廉規克斯について「フランスの作家 William Le Queux (1864-1927)」だとわざわざ明記する。ここが馬泰来説と異なる。というよりも以前の馬泰来にもどってしまった。しかも『重臣傾国記』を参照するように指示してい

る。

そこで『重臣傾国記』の該当箇所を見る。

#### 付建舟の誤指摘

付建舟の説明を直接引用したほうが理解が早い。

《樽氏目録》第4736頁記載、《重臣傾国記》(Her Majesty's Minister), 原著者为 William Tufnell Le Queux (1864-1927)。樽氏沿襲原著者属英国這一説法, 但這一説法有誤, 不是英国而是法国。他出生于英国倫敦, 其父是法国人, 其母是英国人。345-346頁

『樽氏目録』第4736頁の記載によると『重臣傾国記』(Her Majesty's Minister)は原著者は William Tufnell Le Queux (1864-1927)である。樽本氏は原著者がイギリス人であるという見方を踏襲するがこれは誤りでイギリスではなくフランスである。彼はイギリスのロンドンに生まれたがその父親はフランス人で母親はイギリス人だ。

上に見える『樽氏目録』というのは樽本編『清末民初小説目録』のひとつを指す。ただし第4736頁というのは不正確。第6版の第4734-4735頁に『重臣傾国記』3種類を収録する。

付建舟の説明には訂正すべき箇所が2カ所ある。

ひとつは『重臣傾国記』の原作だ。“Her Majesty's Minister”は間違い。正しくは“BEHIND THE THRONE (玉座の後ろ)”(1905)である。

付建舟がよった樽目録第6版が誤っている。それには理由がある。『商務印書館図書目録(1897-1949)』(北京・商務印書館1981。97-98頁)だ。これにそう明記してあるのを樽目録が引用した。今回あらためて確認したが原

William Le Queux

"Behind the Throne"

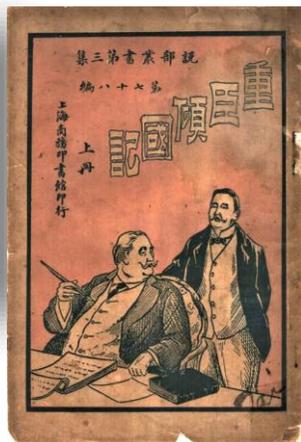
Chapter One.

The Cat's-Paw.

"Of course the transaction is a purely private one. There is, I suppose, no chance of the truth leaking out? If so, it might be very awkward, you know."

"None whatever. Your Excellency may rely upon me to deal with these people cautiously. Besides, they have their own reputation to consider—as well as ours."

"And how much do you say they offer?" asked His Excellency in Italian, so that the English servants, if they were listening, should not understand.



作ではないことが判明した。底本は上記の作品であることをつきとめた。訂正する必要がある。

もうひとつ。付建舟がわざわざル・キューのことをフランス人とする箇所だ。父親がフランス人で母親がイギリス人ならば両系統の人であるということにすぎない。父系を強調してフランス人とするのか。よくわからない理由だ。作家としてのル・キューを見れば多数の著作が英語で書かれている。ならばイギリスの作家というのが普通のとらえ方ではないか。

だいいち前述のとおり樽目録第6版よりル・キューをフランス人とするのは誤りだと馬泰来を引用して明記している。付建舟は同じ第6版の別箇所を指してもとのフランス人に引き戻したことになる。馬泰来に言及しないからすでに指摘があることを知らないらしい。

該漢訳の初出は(英)威連勒格克司著 趙尊嶽訳「重臣傾國記」(『東方雜誌』15卷6-16巻6号 1918.6.15-1919.6.15)である。



本文に表記して「英威連勒格克司原著」とあるのを見てほしい。またその「訳余剩語」のなかでは「ウィリアムは英国最近の作家であり健在だ〔威連為英国邇来之文家。人猶健在〕」と説明している。その漢訳者の説明までも否定してフランス人とするのは理解できない。

別の書物を参照しそれを示して樽目録第12版では次のように注記することにした。「LE QUEUX は英国人とするのが常識。LE QUEUX, WILLIAM (TUFNELL). BRITISH. (TWENTIETH-CENTURY CRIME AND MYSTERY WRITERS. P.939)」

『俄宮秘史』——「法国魁特転訳徳文」について

ふたたび『俄宮秘史』にもどる。

林紓+陳家麟共訳『俄宮秘史』には「法国魁特転訳徳文」とあるとくり返す。

前出付建舟の著作3種から関連部分を説明しながら紹介する。2013、2015、2019年と重ねているからその順序だ。

[付二295] 上下巻表紙奥付写真あり。奥付は原著者法国魁特、刊年部分は見えない。次のように説明する。「俄宮秘史」, 訳文為文言体, 署「法国魁特原著」有誤, 卷首題有「法国魁特転訳徳文」字様, 原稿為徳文或意大利文, 後由魁特訳為英文。「説部叢書」四集系列第四集第一編, 中華民國十年(1921)五月初版。( [付115] も同じだから省略する)

ル・キューと原作についての説明はない。『美人磁』の箇所でも説明したのと同じである。馬泰来論文を知らなければそうならざるを得ないだろう。「署「法国魁特原著」有誤」については [付説] の箇所でも説明する。

『俄宮秘史』の内容がニコライ2世皇后(アレクサンドラ・フョードロヴナ)についてのもの

のだ。それで付建舟は彼の経眼録シリーズ「ロシア小説巻」にも収録した。

該書には前言として置いた論文「清末民初俄国小説訳介路徑綜考」がある。〔付俄9〕と〔付俄11〕はそのページ数を示す。本文の〔付俄271〕も上下巻表紙奥付写真を掲げてその説明は〔付二295〕と同じだ。

最近の〔付説〕で説明される『俄宮秘史』のル・キューは〔付二295〕を継承している。そう書かなければならない時点で暗雲が生じる。結局は本稿冒頭に紹介した馬泰来1993論文を付建舟が知らないことに起因する。同時に樽目録第6版の説明が付建舟の注目を引かなかったことでもある。

問題のひとつは「署「法国魁特原著」有誤」という説明だ。間違いだというのだからフランス表示についてのものだと思うだろう。ところが付建舟の意図はそこにはない。『重臣傾国記』のところで触れた。〔付説326〕においてル・キューがフランス人であることを強調したのだ。一般にはイギリス人とするのとは異なる。

ル・キューのフランスはそのままにする。その根拠は訂正以前の馬泰来「林紓翻訳作品全目」と彭建華『現代中国的法国文学接受』（2008）だ。馬泰来1993論文が見えないからそうなる。

付建舟が間違いだとする対象は「原著」の方なのだった。簡単に述べればル・キュー原著ではないという付建舟の主張である。付建舟の文章を引用するが翻訳はしない。関連部分を取り出して説明する。

〔付説415-416〕可能因為《俄宮秘史》版權頁署“原著者法国魁特”的緣故。然而，他們均忽略了作品卷首“法国魁特転訳徳文”的字樣，更忽略了卷首“小引”。出自法国魁特之手的“小引”說，此卷為斐多路納之秘史，“記之者，丹考夫伯爵夫人也。……凡以下所叙述，均出諸丹考夫之口，語皆切實……丹考夫草稿為徳文，或意大利文，余

則訳以英文，語語皆肖，無復謬誤”。由此可見，《俄宮秘史》由俄国丹考夫所撰，由魁特英訳。林紓、陳家麟可能根拠英訳本漢訳。／俄国丹考夫与法国魁特生平事迹不詳，待考。

林訳が原著者をル・キューとするのは『俄宮秘史』の奥付にそう記してあるからだ。

それに対して付建舟が「原著」が間違っていると主張する根拠はふたつある。

ひとつは該漢訳書の本文に「フランス ル・キューがドイツ語より転訳〔法国魁特転訳徳文〕」とあること。問題はドイツ語原文から転訳した箇所だというのが。

さらに進めてもうひとつは漢訳「小引」である。

原作冒頭にある著者の説明「著者から読者へ TO THE READER / FROM WILLIAM LE QUEUX」が漢訳では「小引」となる。ここに該書の成り立ちについてル・キューの説明がある。

「（ニコライ2世皇后（アレクサンドラ・フォードロヴナ Alexandra Feodorovna 斐多路納）の私生活を）記録したのはザンコフ男爵夫人（Baroness Zéneide Tzankoff（旧姓 カメンスキー Kamensky）丹考夫。林訳は伯爵夫人とする）である」。ザンコフ夫人の草稿はドイツ語あるいはイタリア語で書かれておりそれをル・キューが英語に翻訳した。

付建舟はそこを見て独自の考えを提出する。すなわち作品成立の経緯を考えれば原作者はル・キューではなくロシアのザンコフ夫人でなければならない。

付建舟の新提案を検討する前に少し説明する。

皇帝ニコライ2世といえば皇太子時代に日本滋賀県大津市を訪問中に警察官・津田三蔵により傷を負わされた大津事件が思い出される。だいたい以前、大津市内で関係の遺品が展示されたことがある。そのなかのひとつに皇太子の出血

をぬぐった白い布があった。端に大きく四角の欠けがある。旧ソ連に貸し出したとき切り取られたという説明があった。このたび関連の機関をネットで検索するとハンカチだという。切り取りについては言及がない。

原稿の作者ザンコフ夫人という人物についてル・キューは以下のように書いている。要点だけを取り出す。

カメンスキーは後のアレクサンドラ皇后と同級生であった。1894年にニコライ2世と結婚してからは皇后付の女官を長年勤めた。ボリス・ザンコフ男爵 (Baron Boris Tzankoff 伯爵包雷 (林訳はここでも伯爵とする)) と結婚したのち別の女官と確執があって宮廷を去る。ロンドンで外交生活を送っていたところ夫ザンコフ男爵が肺炎で死去した。それを知った皇后はザンコフ夫人をふたたび宮廷に呼び戻した。夫人は皇后がロシア革命でシベリアに流刑になるまでその元に仕えた。

ル・キューがそういうザンコフ夫人となぜ知り合ったかというザクセン王太子妃ルイーゼ (Louisa, the ex-Crown Princess of Saxony / Archduchess Louise of Austria のこと。路沙) の紹介があったからだという。

ル・キューの「序」には実在の人物が出てくる。そうするとザンコフ夫人も実在したのだろう。

一応調べはした。たとえばネットで見た『ロシア宮廷回想録 RUSSIAN COURT MEMOIRS 1914-1916』(1917)には似たような人物が出てくる。

元ブルガリア内務大臣の息子ルツカノフ・ザンコフ (Lutzkanoff-Tzankoff) 大尉である。彼は元農務大臣謙國務長官の娘で宮廷女官であるマリー・アーモロフ (Marie Ermoloff) と結婚した。だがこの女性はル・キュー本に説明のある旧姓 Kamensky とは名前が一致しない。これでは人物の特定ができないのと同じことだ。

そのザンコフ夫人が残した草稿がドイツ語あ

るいはイタリア語であったという。ル・キューがそれを英語に翻訳した (The Baroness's manuscript is mostly in German or Italian, but in translation and editing I have endeavoured to adhere strictly to her meaning.)。

付建舟もこの部分を紹介している。ロシア宮廷の女官がドイツ語とイタリア語で草稿を残すだろうか。違和感があるのは事実にしても否定する資料もない。そのまま信じるしかないだろう。

そこで付建舟の提出した問題だ。『俄宮秘史』の原著者はル・キューではなくザンコフ夫人でなくてはならないという。はたしてそうか。

私の考えを述べる。ザンコフ夫人は資料を提供したにすぎない。それもドイツ語とイタリア語の資料だ。それが書物のかたちになるためにはル・キューの英訳と編集がなされなくてはならなかった。ル・キューを抜きにしては成立しない書籍ならばその著者はル・キューをおいてはいない。

それでは不十分だということであれば「ザンコフ夫人資料提供、ル・キュー著」と表示することを提案する。 ☐

★ ★

『中国出版史研究』2021年第2期 (総第24期)

2021.4.20

【書評】近代言論空間の産生と民族主義の啓蒙——李仁淵《晚清的新式傳播媒体与知識分子：以報刊出版為中心的討論》述評 ……劉 健

【書評】媒介研究視野下の晚清政治文化變革史——評李仁淵《晚清的新式傳播媒体与知識分子：以報刊出版為中心的討論》 ……何 旻

固体与結構之間：黄金時期晚清出版史的述說方式

……李 仁淵

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>

## 陳景韓漢訳コレリ『新蝶夢』の奇怪

——黒岩涙香訳『白髮鬼』

神田 一三

黒岩涙香の日本語訳『白髮鬼』がある。それをもとに陳景韓が漢訳して『新蝶夢』になった[艶麗10]。さかのぼると涙香訳本にはイギリス原本がある。原作を起点に置いて日訳を第1翻訳(または改編)と称す。継続しているから漢訳は第2翻訳となる。清末民初でよく見かけるイギリス原本→日訳(第1翻訳)→漢訳(第2翻訳)という順序である。

### 陳景韓漢訳がかもす違和感

漢訳と底本の日訳を見て最初に気づくのは書物の厚さが違うことだ。涙香訳『白髮鬼』は新書版で522頁ある。一方の漢訳『新蝶夢』は60頁の薄さだ。判型が異なるとはいえこの厚薄の相違は印象に残る。

文字数をざっと計算してみる。見た目のページ数より事実を反映しているだろう。

概数をいう。底本の涙香訳『白髮鬼』は本文42字×12行×522頁＝約263,088字だ。ところが陳景韓漢訳『新蝶夢』は本文29字×11行×60頁＝約19,140字にすぎない。

日本語を漢訳すれば普通は減少して約3分の2くらいの分量になる。陳景韓訳が全体で約17万5千字くらいであれば通常だ。つまり『新蝶夢』の判型で約550頁になってもおかしくはない計算である。しかし実際は上のおり約1万9

千字60頁にとどまっている。単純に見れば漢訳全体は日訳の7.2%だ。『白髮鬼』は涙香訳に比較して圧縮しすぎだろう。そうなった理由があるはずだ。

漢訳は本文自体を短縮しながら冒頭に「新蝶夢弁言」を4頁もつけている(後述)。不均衡である。しかも説明して原本がイタリア人作で20万言だがそれを抄訳して1、2万言だという。おおざっぱな数字だ。また原作者はイタリア人だと書きながら漢訳の底本である日本語訳本を隠している。いろいろと疑問点の多い漢訳である。

漢訳を推し進めてどうしてこの薄さになったのか。本稿ではそれを主として説明する。

### 原作と底本

原作者はイギリスの小説家マリー・コレリ(MARIE CORELLI, 1855-1924)、題名は『ヴェンデッタ』という\*1。

その書名は昔のイタリアで行われた復讐、仇討ちを意味する。これが涙香訳『白髮鬼』になったことはすでに緒方流水(1902)\*2が明らかにしている。涙香とほとんど同時代の指摘だ。

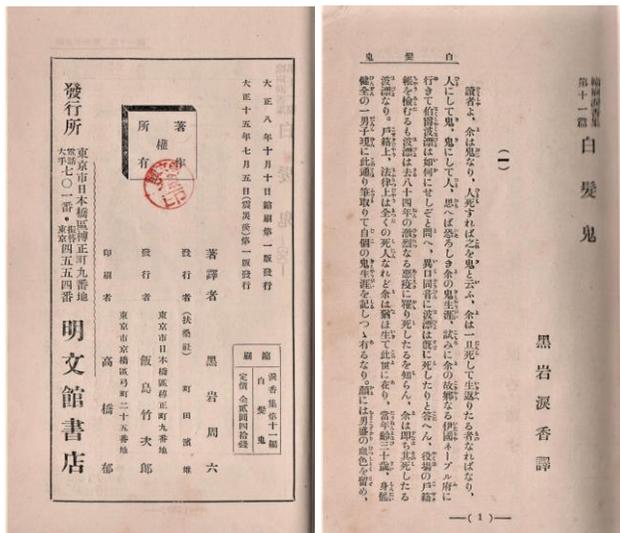
以後は柳田泉(1935)\*3あるいは伊藤秀雄(1971)\*4らがコレリ原作説を伝えている。

涙香日訳の初出は『万朝報』1893.6.23-12.29連載という(未見)。

単行本は(ハビヨ・ローマナイ原著)、涙香小史訳述『白髮鬼』初後篇(扶桑堂1894.1.2、1894.2.13。未見)がある。架蔵するのは(ハビヨ・ローマナイ原著)、黒岩涙香(周六)訳『白髮鬼』全107回(明文館書店1919.10.10縮刷第一版/1926.7.5震災後第一版)だ。

参考までに示せば黒岩涙香著『白髮鬼』(春陽堂1934.7.12、日本小説文庫349。千葉亀雄「白髮鬼について」あり)が国立国会図書館デジタルコレクションに収録されている。

上で「ハビヨ・ローマナイ原著」にカッコをつけたのには意味がある。涙香単行本の前面に



押し出して「ローマナイ原著」と表示しているわけではないからだ(後述)。しかし「訳者の前置」で説明はされている。

のちに版元が広告に「ハビヨ・ローマナイ原著」と表示した。涙香訳『(縮刷)噫無情』(扶桑堂1915.9.18/1918.10.3廿三版)に「近刊(大正八年八月発行)」とある。原著者を表立って知らせるのは後になってからのようだ。ただし原著者といいながら「ハビヨ・ローマナイ」は架空のものである。



広告1918

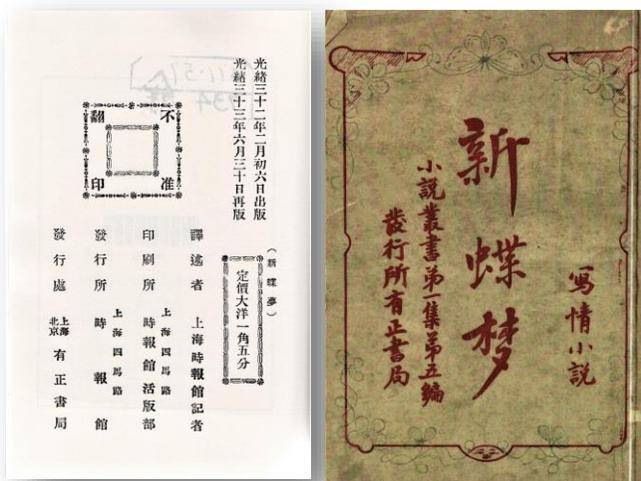
本当の原著者コレリは該日訳本のどこにも記述はないのだった。だからこそ流水の記録に価

値がある。

### 漢訳と言及文献

筆者が見ている陳景韓漢訳本は次のとおり。

(意大利)波倫著、冷(上海時報館記者陳景韓)訳『(写情小説)新蝶夢』上海北京・有正書局 光緒三十二年二月初六日(1906.2.28) / 光緒三十三年六月三十日(1907.8.8)再版 小説叢書1=5(影印本)



『時報』(1905.11.10-12.19)に連載された(未見)。それが上の単行本になった。

涙香日訳の漢訳について言及する中国人研究者の文章は多くはない。2本を抜き出して示す。その著者はふたりとも日本語を理解する。英語原作と涙香日訳を確実に把握し簡潔に記述しているから選択した。既発表の文献を視野に入れて基本事項を押さえた優秀な論文だといえる。論文名など詳細は略号とともに文末の参考文献にあげておいた。

[艶麗10] Marie Corelli “Vendetta, A Story of One Forgotten” 1886. 黒岩涙香「白髮鬼」『万朝報』1893.6.23-12.29. 『白髮鬼』初後篇、扶桑堂1894

[国蕊14] 日訳底本: 「白髮鬼」、ハビオ・ローマナイ著、涙香小史訳、扶桑堂、

1893. 原作: *Vendetta*, Marie. Corelli

2論文ともに陳景韓『新蝶夢』の日本語底本からその原作まで明記しているのがよい。

### 原作者名表記の疑問

前述のとおり原作者マリー・コレリはイギリスの女性小説家だ。ところが涙香訳では「イタリアのハビヨ・ローマナイ原著」と仮託している。「訳者の前置」にその経緯を述べているからそれを見よう。

死者が生き返るといふ実話だと説明する。それを語る人物が「ネーブル府の貴族、ハビヨ、ローマナイ氏」である。ネーブルは **Naples** (ナポリ) だ。本文の別の箇所では「伯爵<sup>ハビヨ</sup>波漂<sup>ハビヨ</sup>」として登場する。

原作が自述の体裁をとっている。ゆえに原著者は「ハビヨ、ローマナイ」である。英語原文は **Fabio Romani** (ファビオ・ロマーニ) と記す。涙香は本文中で「伯爵<sup>はくしやくはびよ</sup>波漂」と漢字を当てた。涙香は原文の「ni」を「ナイ」と読む。つまりローマナイだ。

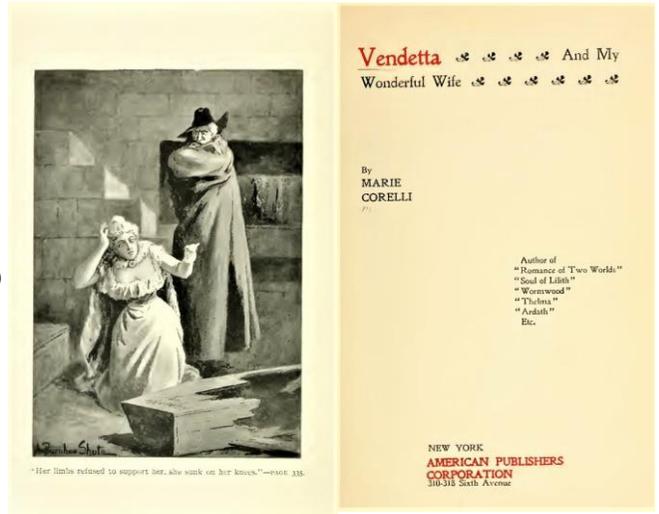
陳景韓はそこをさらに漢訳して「意大利南皮府波侖伯爵」とする。涙香日訳を踏まえているのは明らかである。「ネーブル」は「南皮」に「ハビヨ、ローマナイ」が「波侖」に該当する。分解すれば「波 = Fabio: 日訳の波漂ハビヨ」と「侖 = Romani: 日訳の羅馬内ロマナイ」である。「波」は共通する。そのまま「波漂」を漢訳で使用してもよかった。なぜだかそうはしていない。日訳の「羅馬内」を利用せず「侖」に置き換えた。漢音として「波侖」の方が安定するということか。

涙香は原作者コレリの名前を出していない。陳景韓はもとからコレリのことには知らなかった。しかも作品自体が自伝の形になっている。ゆえに「意大利波侖著 [ローマナイ著]」にした方が漢訳小説として理にかなうという判断だったのだろう。彼が涙香日訳を底本にした別作品も

ある。その時は涙香小史と記すこともあった。しかし『新蝶夢』のばあいは涙香を示さなかった。理由は不明だ。底本作者名の表記について厳密ではないということはわかる。

### 翻訳の実例

コレリ作の冒頭を見る\*5。



挿絵、扉 open library より

I, WHO write this, am a dead man. Dead legally—dead by absolute proofs—dead and buried! Ask for me in my native city and they will tell you I was one of the victims of the cholera that ravaged Naples in 1884, and that my mortal remains lie mouldering in the funeral vault of my ancestors.

これを書いている私は死んだ人間だ。法的には死んでいる——絶対的な証拠で死んでいる——死んで埋葬されているのだ。故郷の街で私を探せば1884年にナポリを襲ったコレラの犠牲者のひとりであり、私の遺骸は先祖の墓場の地下納骨所で朽ちかけて横たわっていると云われるだろう。

コレラが原因で死亡した死者がこの作品を執筆しているという設定だ。以下は涙香日訳の該

当部分。

読者よ、余は鬼なり、人死すれば之を鬼と云ふ、余は一旦死して生返りたる者なればなり、人にして鬼、鬼にして人、思へば恐ろしき余の鬼生涯、試みに余の故郷なる伊国ネーブル府に行きて伯爵波漂は如何にせしぞと問へ、異口同音に波漂は既に死したりと答へん、役場の戸籍帳を検むるも波漂は去八十四年の激烈なる悪疫に罹り死したるを知らん、余は即ち其死したる波漂なり。

涙香は原作にはない波漂(ハビヨ/原作ファビオ)を織り込む。コレラは「悪疫」に置き換えた。それ以外はほぼ原作どおりだ(以下登場人物は涙香によるカタカナ表記とする)。

同じ箇所を陳景韓は次のように漢訳した。

看官、我乃鬼也。我雖在此執筆作文。然我已早死。人死謂之鬼。而况我所遇之人。所見之事。無一非為鬼為蜮。禽獸不如。読者諸君、私は幽霊だ。私はいま文章を書いているがすでに死亡している。人が死ねばそれを幽霊だという。しかしながら私が出会った人、見聞いたことは畜生も及ばない怪物であった。

底本の大意はおさえている。しかし逐語訳というわけではない。人名も地名もここには漢訳しなかった。

ハビヨは生まれてすぐに母親を失った。17歳の時父である伯爵に死なれて莫大な財産を受け継いだ。色酒博打にふけることもなくただ読書を楽しんだ。

陳景韓漢訳には独自の創作部分がある。彼にとって読書以外では1頭の犬が友だった。涙香日訳、コレリ原作にも犬のイビスは出てくる。しかし最初に登場するその場所が異なる。底本

よりもずっと前部に突然その名前「白虎」を挿入したのだ。

我在家中。除了以書為友之外。還有一頭靈犬。叫做白虎。那白虎是我父親生時。遊歷倫敦的時候。有個朋友送的。生得身長半丈。腰大五圍。十分雄壯。又極靈敏。因此我丟着書時。便和那白虎玩耍。有時出門閒散。也必帶着他走。所以除了書外。那狗便是我第二個朋友。3-4頁

私は家にあつて書物以外に友とするのは1頭の名犬がいる。白虎という。白虎は私の父が生存していた時ロンドンに行ったおりある友人が送ってくれたものだ。身長は半丈、腰回りは5まわりもある。雄壯にして極めて敏捷だ。私が書を置いたときにはその白虎と遊んだ。散歩に外出するときも必ず連れて行った。だから読書以外にはその犬が第2の友人だった。

陳景韓は涙香本を大幅に短縮する。ところがこの犬「白虎」について原文とは違う箇所に加筆している\*6。中国の読者は何も思わないだろう。しかし涙香本と比較対照すれば奇妙だといわざるをえない。これには陳景韓の特別な意図があった。結末に直結する伏線にしている。注目箇所だ。

ハビヨの唯一の友人といえる者がいる。貧乏画家で女好きの花里魏堂はなざとぎだう(以下ギダウと称す。原作では Guido Ferrari グイド・フェラーリ/花利)だ。

ハビヨは女性に興味を持たなかった。ところが偶然に出会った歌うたう少女群のなかのひとりを見初めた。それが妻となるニーナ(Nina/那稲ナイナ 7頁/漢訳は「妻」。音訳なし)だ。涙香はここでも原文の「ni」を「ナイ」と読む。以下ナイナを使用する。

コレリ原作と涙香日訳、陳景韓漢訳の該当箇所を以下に抜き出す。

I gazed and gazed again, dazzled and excited: beauty makes such fools of us all! This was a woman — one of the sex I mistrusted and avoided — a woman in the earliest spring of her youth, a girl of fifteen or sixteen at the utmost. Her veil had been thrown back by accident or design, and for one brief moment I drank in that soul-tempting glance, that witch-like smile! The procession passed — the vision faded — but in that breath of time one epoch of my life had closed forever, and another had begun! p.12

私は見つめまた見つめ眩惑され興奮した。美しさは人をバカにするものだ！私が不信感を抱き敬遠していたのがその女性というものだった。この女性は青春の一番早い春を迎えたせいぜい15歳か16歳くらいの女の子だ。彼女のベールは偶然か意図的に剥がれ落ちて私は一瞬だけその誘うような視線と魔女のような微笑みに酔いしれた。行列は過ぎ去り情景は消えてしまったが、その一瞬の間に私の人生のひとつの時代が永遠に閉じ別の時代が始まった。

ナイナは15、16歳だとある。ハビヨが彼女に一目ぼれした瞬間である。涙香訳は次のとおり。

余は只管に其中の一人に見入りたり、微妙なる其声にて唱ふ一人、是れ人か是れ天女か群居の中に唯一人輝くばかりに美しき其面影、年十六は既に、十七に未し、何等の眼、何等の唇、古人が毒薬と評せしは猶此女の生まれ出ぬ先なればこそ、然り世間の女皆毒薬にして此女唯一人其毒を消す回春剤か、余は其姿を見るばかりにて二十年来の味き無き浮世より天国に生れ出たる心地

せり。手の舞ふも知らず足の踏むも知らず、人の怪みて余の姿を見るも総て知らず、眼中唯だ其可憐なる姿あるのみ。5頁

読者よ、女を悪魔とのみ思ひたる余が、突然女に溺しとは、書も恥しき次第なれど余は餘りの嬉しさに其恥かしさも忘れてたり。この女無かりせば余は生涯木石の如き男にして人の人たる情を知らず、昔の学者に欺かれて終に我過ちを悟り得ずして終りしならん。思へば此女、余が百年の迷ひを覺せたる有難き大智識、拝み崇み奉らずんば有るべからず、実に百聞は一見に如ず唯一度見し美人の顔、忽ちまちに百冊の旧聞を霧の如く搔消したりとは……。6頁

涙香は直訳にはしていない。原文によりながら加筆しつつ自由に日訳していることがわかる。原文はひとつの時代が終わり別の時代が始まったと書いた。涙香はより具体的に「味き無き浮世」と「天国」に言い換えて読者にはわかりやすくなった。ナイナの年齢を16、17歳と引き上げる。ハビヨは今までの読書がむだであったと気づいた。

陳景韓は涙香日訳を少し圧縮する。

那一群女士中間。有一個直印入我腦裏來的。年紀正在十七八歲。身材面貌。十分秀麗。自我看見了那女子之後。心中恍然大悟道。天下的婦女。都是迷人的。只有這個。是解迷的醒藥。天下婦女的心。都是含着毒的。只有這個。是解毒的回春丹。我自羞了。羞着讀了幾年的書。都悞聽了古人的話。我又自愧了。愧着活了幾十歲。至今纔跳出了古人的圈套。知道婦女的真相。我又自恨了。恨着今日以前。為何不早有今日。使我早享婦女幸福。我心中這樣想。眼中只顧看着那女子。等到後來。那女子早已過去了。7頁  
その女性の群れの中に私の脳裏へ直接印象付けたものがいた。年齢はちょうど17、18

歳、身体と容貌は十分に秀麗だ。その女性を見てから私は突然に理解した。この世の婦女は人を迷わせるものだ。ただあの人だけが迷いから醒めさせる薬だ。この世の婦女の心には毒を含んでいる。ただあの人だけが解毒の治療薬だ。私は自分を恥じた。何年も読書をし続けて古人の言葉を誤って信じていたのが恥ずかしい。私はさらに恥じた。数十歳になるまで生きてきて今ようやく古人の罨から抜け出し婦女の真相を知ったのが恥ずかしい。私は恨みもした。もっと以前に今日という日が早くやってきて私に婦女の幸福を享受させなかったのが恨めしい。私はそう考えその女性をながめ続けた。気がつけばその女性はすでに通過していた。

陳景韓はナイナの年齢を17、18歳にして涙香よりもさらに引き上げた。直訳ではない。単語ならば「毒」はそのままだ、「回春薬」は「回春丹」にしなごらほぼ底本の内容を踏まえる。陳景韓独自のまとめ方をしている。

独自といえは上につづく次の箇所は陳景韓の創作だ。

我還是瞪着眼。立在那裏。好像被人施了催眠術的一般。等了一刻。跟我走的那白虎。见我立着不走。他從前面樹林裏跳了回来。我被他一嚇。纔驚醒轉来。纔知道我立在道旁。看了那道路。又想起方纔看見的女子。便又依依不忍遽去。看看天色。已将近黑。没办法。只得呼了白虎。沿着道路。没精打彩的。走了回去。回家之後。心中好像失了甚麼東西似的。又像得了甚麼東西似的。飯也不想吃。茶也不想飲。書也不想看。睡也不想睡。心中眼中只想着方纔的女子。眼睛閉時。宛然那女子。在我面前。狭長的身兒。尖溜溜的面兒。亮晶晶的眼兒。紅的綠的衣服兒。活潑潑的行動兒。想着他的形容。

便又彷彿看着他笑。聽着他唱。翻来覆去。直鬧了一夜。7-8頁

私は目をみはりそこに立ったまま催眠術をかけられたようだった。しばらくして私と一緒にだった白虎は私が立ち止まっているのを見て樹林の中から跳び戻ってきた。私はそれに驚きようやく意識を取り戻し道端に立っていることに気づいた。その道を見て先ほど見かけた女性を思い起こし心残りがしてすぐに行く気にはなれなかった。空の色を見ればもう暗くなりかけている。しかたなく白虎を呼びしよんぼりと歩いて帰った。帰宅してのち心の中ではなにか物を失くしたようでもあり得たようでもある。食事もする気にならず茶も飲みたいとも思わない。読書もしたくなく眠りたくもなかった。内心では先ほどの女性のことをただ考え目を閉じればあたかもあの女性が私の目前に浮かび上がるようだ。細い身体、鋭く上がった顔、輝く眼、色とりどりの衣服、生き生きとした動き。彼女の様子を思えばそのまま笑うのを見て歌うのを聞く気がした。くり返しその夜じゅうそういう状態だった。

ナイナに魅入られたハビヨの心理状態を詳細に加筆している。犬の白虎を忘れずに登場させた。

このまま筆を進めれば底本の長さからいって長篇漢訳になるだろうと予想される。それが実際にはこの薄さだ。どこでどうなったのか。

ハビヨはナイナと結婚した。ギダウとも以前通りに親しく3人で楽しい日々をすごすうちに女の子が生まれた。ステラ(Stella/星子/玉児)である。その子に対するギダウの態度に少しの違和感を抱いたハビヨだった。

そうして在所ネーブル府が疫病の流行に見舞われた。ハビヨは十分用心していたが邸宅からうっかり出たためにコレラに感染して急死した。

1884年8月15日(32頁)、27歳の時だ。漢訳は「享年二十歳有五歳。於一千九百零五年。八月十五日」30頁。漢訳時と同時期に生じた事件にしてしまった。日訳底本から逸脱している。

そのハビヨが棺桶の中で覚醒した。先祖代々の墓蔵に埋葬されていることに気づく。

陳景韓漢訳では細かな改変を行なった。墓蔵は漆黒の闇だ。火をともしなければ動きが取れない。火をどうするかが問題だ。涙香は「余は大の喫煙家にて燐寸を衣囊より離せし事なし」

(31頁)とした。それを漢訳ではタバコを吸わないと変更する(「我不是吃煙の人」27頁)。漢語で「煙」はアヘンを意味することがある。それを避けたとも考えられる。タバコなしでは墓蔵での灯りに困るから非常用の小箱を所持していたことにした。それにマッチが入っている(「匣内装着幾十株の火柴」29頁)。このような細かな改変が必要であったのかは疑問だ。アヘンと区別するためであれば納得する。

ハビヨはその墓蔵において海賊王カルメロ、ネリ(Carmelo Neri/軽目郎、練/海盜赤劍党33頁)の財宝を偶然見つけた。秘密の出入り口から外にでると邸宅にもどるまえに衣服を着替えることにした。そこの主人から聞いたのはナイナの悪い評判だった(漢訳では省略)。さらに自分が白髪になっているのを鏡で見て驚愕する。昨日までの黒髪が突然に変化したのだった。白髪鬼の由来である。

イタリア皇帝ハンバート陛下に会うもハビヨであるとは認識されない(漢訳では省略)。食堂で外に行くギダウを見かけた。彼は赤いバラを挿している(それらも漢訳していない)。

陳景韓が涙香を底本にしているのはわかる。ただしいくつかの省略がある。一方で加筆もする。自分の邸宅につくまでに周囲の風景を見ながら妻との往事を懐かしく思い起こす(43頁)。そういう加筆をほどこして語る目的はただひとつだ。ハビヨの死去を悲しんで打ちひしがれているはずのナイナがどのような状態にいるのか

を際立たせるための工夫なのだった。

自分の邸宅にたどりついたハビヨは何を目撃したか。ナイナはギダウと親しく抱き合っていた(日訳61・62頁/漢訳46頁)。

She spoke — ah, Heaven ! the old bewitching music of her low voice made my heart leap and my brain reel.

“You foolish Guido !” she said, in dreamily amused accents.

“What would have happened, I wonder, if Fabio had not died so opportunely?” p.63

彼女は話した——ああ、まったく！彼女のなじみのある妖艶な音楽のような低い声は私の心を跳躍させ私の頭を巻き戻した。

「おバカなガイド！」と彼女は夢見心地に面白がっている口調で言った。

「ファビオがあればほど好都合に死ななかつたとしたらどうなつたでしょう？」

家に入る機会を失い隠れて聞くことになったハビヨはその言葉に衝撃を受けた。一方の涙香日訳はこうだ。

声に応じて魏堂が那稻の顔を見上るを持ち、那稻が何と後の句を継かと思へば

「だがネ、魏堂、丁度好い時に波漂が死だから好ツたけれど」64頁

涙香訳の後半部分はほぼ原文どおりだ。次は陳景韓漢訳である。

我耳内忽然又聽得如奏音樂的声音道。幸虧那波命死了。48頁

私の耳に音楽を奏するような声がふと聞こえた。「うまい具合にハビヨは死んでしまったわ」

ナイナの声について涙香は「人を酔せる音楽より猶爽やかなる声を洩せり」(63頁)と書いた。陳景韓は前の部分にあるそれをここに取り込んだ。それは偶然にもコレリ原作と一致した。

### 突然の改変と転換

ナイナとギダウは夫婦よりもなお親しい様子で室内に入っていく。ハビヨは茂みに隠れたままそれを見送った。

これが涙香日記第15回である。ここからハビヨの復讐が始まる。全107回の残り92回を費やす。彼は富豪チェザレ・オリヴァ伯爵(Count Cesare Oliva/笹田折葉伯爵/漢訳なし)と名乗り黒メガネをかけて行動する。はじめの対象はギダウ、次にナイナの順である。いかにしてナイナとギダウに復讐するか。題名通りの結末にむかうその筋運びを漢訳読者は堪能するはずだった。

ところが陳景韓の漢訳ではこれとは大きく異なる。涙香訳に出てくる笹田折葉伯爵は漢訳には登場しない。なぜなら犬の白虎が突然出現してギダウを喰い殺してしまうからだ。

ナイナとギダウはちょっとした事でもめて大声を出した。それを聞いた白虎が条件反射でとびかかってきたのだ。

他便從樹林底下直跳出來。撲至花利面前。便叫。花利正在煩惱的時候。被他一叫。更動了怒。連忙一手放了那婦人。用脚來蹴那犬。那犬見花利來蹴。知道和他相爭。便更奮勇向前。花利的脚到時。恰好和那犬的口碰了個着。那犬更萬分憤怒。便順勢咬了一口。那花利痛極而号。想要再用那個脚再蹴時。早被那犬一撞。撞倒在地。58-59頁  
犬は樹林からとび出るとギダウの面前に突き進んできて吠えた。ギダウはちょうど難儀していた時だったから吠えられてさらに腹を立てた。婦人の手を慌てて離すと足でその犬を蹴った。犬はギダウが蹴ってきた

ので彼が敵だと知ってさらに突っかかってくる。ギダウの足がちょうど犬の口にぶつかると犬はもっと怒り勢いにまかせとカブリと噛んだ。ギダウはあまりの痛さに大声をあげもういちど蹴り上げようとしたときその犬から体当たりをくらい地面に倒れた。

ギダウと白虎の闘争にナイナ(ただし漢訳名はない)が混じり込む。椅子から立ち上がって白虎を足蹴にした。

這時花利正在地上乱滾。那犬也在地上乱咬。那婦人雜在中間乱蹴。乱喊。忽然聽得鳥的一声。那婦人也被犬咬着一口。跌倒在地上。忽又聽得鳥的一声。那花利早已被犬咬着要害處。叫了一声死了。59頁

その時ギダウは地面をやたらと転がっていた。その犬もめったやたらに噛みついてきた。その婦人はその間に挟まってめちゃくちゃに蹴りわめきたてた。突然ウツと声が聞こえた。その婦人は犬にガブリと噛まれて地面に倒れたのだった。さらにウツと声がした。あのギドウが犬に急所を噛まれて一声叫んで死んでしまったのだった。

翌日の新聞報道によって同時に傷を負ったナイナは死亡したとわかった。ハビヨは墓蔵で見つけた海賊(赤剣党)の貨幣で世界周遊に出発した。おわり。

長篇小説の入り口にはいったところで突然物語が終了したような感じだ。それにしてもあまりにも唐突だ。これではハビヨの敵討ちを犬の白虎が代行したことになる。主人の命令もなく咬みつくだろうか。白虎の行動にも疑問がわく。翻訳者のすべき事ではない。陳景韓になにがあったのだろうかと不審に思う。

### 包天笑の証言

陳景韓の当時の行為を包天笑が記録している。

包天笑が「空谷蘭」を新聞連載している時だった。その底本は同じく涙香訳『野の花』である。陳景韓に1回の翻訳代金を依頼したところ彼は勝手に筋を書き換えたという実話だ\*7。

陳景韓の性格が奇妙だと感じた理由を包天笑は述べている。すなわち陳景韓が日本語小説を翻訳していて随意に書き換えたという事実を挙げる。この回憶録の同じ箇所まさに『新蝶夢』にも言及しているのが興味深い。

包天笑は具体的な作品名は出していない。しかしそれが『新蝶夢』であることを李志梅(2005)、闕文文(2013)らが指摘している\*8。

包天笑の回憶録からその箇所を引用する。

記得他也曾訳一部日文小説，以訳了大半部，不高興訳了，弄出一條狗來，把書中那個主角咬死了。我駭問何故，他說：“他也不是好人，死了就結束了。”他就是有這怪脾氣，……(略)\*9

彼(陳景韓)が日本語小説をかつて翻訳した時のことだ。大半を訳し終わったが訳しつつけるのに興味を失った。そこで犬を1頭作り出しその主人公を咬み殺させた。私(包天笑)は驚いてどうしてそんなことをしたのだと問うた。「そいつは良い人間ではない。死ねば終わりになる」と彼はいった。陳景韓はそういう変な性格だった。…(略)

包天笑はその文中で「他就是有這怪脾氣」と同じ語句を2度も使って陳景韓のことを回想している。

陳景韓(冷)と包天笑(笑)はふたりで「冷笑」と表記されることもある。また贋作ホームズ物を競作するほどの仲のよさだ。その包天笑が陳景韓のことを「変な性格だった」というくらい作品については異常だったらしい。

包天笑による興味深い思い出話だ。ただし約半世紀以前のことであることに注意を要する。

その全部を事実だと考えると間違うだろう。

包天笑の回想では具体的な漢訳題名は指定されていない。犬が主人公を喰い殺すから『新蝶夢』であっている。

細かいところだが「大半を訳し終わった」というのは正確なのだろうか。上記したとおりの涙香『白髮鬼』の始まり部分だけで中断している。準備稿として大半は翻訳していたが公表したのはその冒頭だけだったという意味かもしれない。

包天笑の記憶は細部で違う。「以訳了大半部，不高興訳了，弄出一條狗來[大半を訳し終わったが訳しつつけるのに興味を失った。そこで犬を1匹作り出し]」といった。後になっていかにも思いついたように犬を出したように述べる。これは事実ではない。なぜなら漢訳の最初部分から犬は登場しているからだ。

すなわち漢訳の結末を見れば陳景韓が涙香訳にはなかった白虎を独自に設定した理由がわかる。彼は最初から白虎にナイナとギダウを噛み殺させる意図を持っていた。

ナイナは「人面獸心の婦人」(503頁)である。うわべは美女で内面は悪女毒婦だ。コレリ原作はそうしている。涙香はそれを理解した。「彼れは全く美しき皮を以て穢き心を包みたる怪物なり」279頁、「人面獸心」492頁。だから翻訳意図もそのことを描くところにあった。親友であった俗人ギダウも同じく復讐の対象である。ハビヨがどのような方法でその復讐を実行するのか。読者はハビヨが展開する復讐のための大狂言に息をのむ。詳細に描写される過程を読んで楽しむ。

ハビヨは計画を練った。まずギダウを決闘に誘いこんでピストルで射殺した。死ぬ前に自分がハビヨであることを明かしギダウを地獄に突き落とす。復讐のひとつが終了した。ハビヨは別人折葉伯爵になりすましたままナイナと結婚をする。元の夫婦が再度夫婦になるという奇策だ。豪華に行なわれた婚礼夜会の後ハビヨはかねての約束どおりナイナに宝物を見せると呼び

出して墓蔵へ導く。自分の正体を明らかにして置き去りにするつもりが天井の大石が落ちてきてナイナを押しつぶした。これでハビヨの復讐は完結だ。船でイタリアを脱出した。原作では南アメリカへ、涙香訳では南アメリカ、メキシコを経て北アメリカに定住したことになる。

あくまでも主人公はハビヨである。ハビヨを騙し愚弄し嘲笑するナイナとギダウだ。この対立関係で作品は構成されている。

ところが陳景韓は重要人物のナイナには漢訳名を付与していない。「妻」「女主人」「婦人」と記すのみだ。名前を与えないというのは陳景韓のナイナという女性に対する嫌悪感を表している。それは理解できる。しかしその悪人が主要主人公のひとりだ。重要人物の名前を漢訳しない。これは理解しがたい。

陳景韓は涙香の底本をこれ以上ないくらいに切り刻んだ。わずかに冒頭部分だけに絞り込んで完結するように加筆した。そのやり方は普通の翻訳行為には見えない。

### 陳景韓の弁明

漢訳冒頭に置かれた「(言情小説)新蝶夢弁言」は「告罪」だ。つまり罪を告白するという内容である。

どういう罪か。基本的には「情」を否定する小説『新蝶夢』を漢訳したことを指す。要約する。

情とは破ることができない人類の接着剤(粘液質)である。人間関係を繋ぎこの世界を維持するものだ。しかしその情を否定する小説を漢訳してしまった。これが罪である。しかも婦人を侮蔑(褻瀆を4回使用)したから読者は許さないだろう。自分は婦人を恨んでいるわけではないにもかかわらずこの小説を翻訳した。私の罪である。我が国は翻訳という仕事が大盛況でなかでも小説が特に多い。情を言う(言情)小説が多くの人に喜ばれている。男女の相愛を描くのが言情小説である。ところが私の訳した

『新蝶夢』はその情の別面を書いている。言情の勢力を削ぐかもしれない。

陳景韓の言情小説(恋愛小説)についての理解には違和感が生じる。主要登場人物の女性が悪人であってはならないと考えているように読めるからだ。情を描写して仲がよくなければならないのか。それではあまりにも小説家としての許容範囲が狭すぎる。ナイナ、ギダウのように悪人であればあるほどハビヨの復讐は輝きを増す。そこの道理を陳景韓は了解していない。コレリ原作、涙香日訳の意図を把握しそこなったようだ。

この弁明は陳景韓の表面的な告白であるという考えも成立する。つまり偽装だ。ただし全篇を涙香のままに漢訳しおえていればの話だ。悪人の女性を描写しきった。しかし訳者の本音はそうしなくなかった。全訳ならばその言い訳も成り立たないわけではない。

しかし底本を大きく曲げて分量を縮小して提出した。偽装というわけにもいかない。ましてや犬の白虎に復讐の代行をさせるなぞもつてのほかだ。主人公白髪鬼ハビヨの存在意味がなくなるからである。

題名の『新蝶夢』はよくわからない。涙香の『白髪鬼』は主人公の容貌と経歴から理解の範囲内だ。それが陳景韓の手になると胡蝶の夢もどきだ。蝶を夢見た自分は胡蝶の夢でないのか。哲学的な問いかけは復讐を主題とする漢訳内容にそぐわない。

陳景韓はなにか勘違いをしたようにも思える。コレリ原作、涙香日本語訳の翻訳としては不適切である。 罫

【参考文献】 著者でまとめた。略号も示したが引用しないものも含む。

【艶麗07】 李艶麗「二つの『世界末日記』——清末の科学小説と世紀末思潮」『思想史研究』第7号 日本思想史・思想論研究会 2007.3.1

[艶麗10] 李艶麗「「日本」の可能性 冷血作品を解説する試み」『年報地域文化研究』第13号2009年 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 2010.3.31

[艶麗11] 李艶麗「晚清俄国小説訳介経路及底本考——兼析“虚無党小説”」『外国文学評論』2011年1期 2011.2 電字版

[艶麗14] 李艶麗「晚清日語小説訳介書目録(1898-1911)」『晚清日語小説訳介研究(1898-1911)』上海社会科学院出版社2014.8 国家对外文化交流研究叢書

[艶麗19]『晚清文学与明治文学関係研究——“人情”与“女性”』上海社会科学院出版社2019.12

[堀09] 堀啓子「二つの「白髪鬼」——涙香と乱歩の翻案をめぐる」『出版学会・会報』第123号 2009.1 電字版「原作は、Vendetta! or, The Story of One Forgotten というもので、十九世紀末のイギリスの女流作家 Marie Corelliが、一八八六年に発表した作品である。」

[国蕊13] 国蕊「陳冷血の翻訳小説における一人称の試み」『九州中国学会報』第51巻 2013.5.11

[国蕊13B] 国蕊「陳冷血の翻訳小説『生計』に対する一考察」九大中国文学会『中国文学論集』第42号 2013.12.25 電字版

[国蕊14] 国蕊「陳冷血による翻訳小説の底本に関する考察」『跨境:日本語文学研究』第1号 2014.6 高麗大学校日本研究センター 電字版

[国蕊14B] 国蕊「「那破命帝后之臨終」と慈禧太后の死:陳景韓の翻訳小説にある報人特徴への一考察」九大中国文学会『中国文学論集』第43号 2014.12.25 竹村則行教授退職記念号 電字版

[国蕊16] 国蕊「陳景韓對第一人称叙事小説訳介的探索」『明清小説研究』2016年第4期(総第122期) 2016.10.15

[国蕊19] 国蕊「近代翻訳文学中日本転訳作品底本考論——以陳景韓の転訳活動為例」『文学評論』2019年第1期 2019.1

【注】

1) MARIE CORELLI “VENDETTA! OR THE

STORY OF ONE FORGOTTEN” DONOHUE, HENNEBERRY & CO, 1886. 使用する電字版は “VENDETTA AND MY WONDERFUL WIFE” NEW YORK: AMERICAN PUBLISHERS CORPORATION (刊年不記)。表題の別1作品と合本。open library 収録

2) 緒方流水『青眼白眼』星光社1902.6.2。奥付は緒方維嶽([国会])。架蔵は鳴臯書院1902.6.2/1902.8.10再版。ルビ省略。161頁「▲(廿八)白髪鬼(作者)マリー、コレライ(元作)“Ven Detta.”」

3) 柳田泉「黒岩涙香訳介小説目録」『書物展望』第49号 1935.7.1。47頁「明治二十六年/(情仇新伝)白髪鬼 万朝報(六月一十二月) 全百〇六回、明治二十七年一月(前)、——二月(後)単行、全二冊、原本メリ・コレリ作『ヴェンデッタ』」

4) 伊藤秀雄『黒岩涙香その小説のすべて』桃源社 1971.10.25。200、205頁。また『(改訂増補)黒岩涙香その小説のすべて』桃源社1979.5.15。200頁「原本は英国メリー・コレリ女史作、『ヴェンデッタ』(Vendetta—復讐の意)。仮託して、ハビヨ・ローマナイ原著という」。205頁「明治二十七年(1894)年一月二日(初篇)——二月十三日(後篇)、全二冊、全一〇七回刊行(出版社不記)」。さらに「黒岩涙香著訳書総覧」伊藤秀雄、榎原貴教編『黒岩涙香の研究と書誌』ナダ出版センター2001.6.20。120-121頁

5) 次による。MARIE CORELLI “VENDETTA!” NEW YORK: AMERICAN PUBLISHERS CORPORATION (刊年不記) open library 所収

6) コレリ原作では the noble black Scotch collie/my dog Wyvis (p.129)として登場する。また涙香日訳では「殊に余が物足らぬ心地せらるゝはイビスと名附る余の愛犬なり、個は余がハイランドの友人より贈られし稀代の名犬にして」(182頁)とある。陳景韓の犬はそれよりもずっと前に登場させていて底本の犬イビスとは直接の関係はない。底本(原作)では犬がナイナに跳びかかって手を傷つけた。それで射殺させたとナイナは説明した(407頁/p.277)

7) 神田一三「包天笑漢訳クレイ『空谷蘭』について

——涙香訳『野の花』の原作『清末小説から』  
第141号 2021.7.1

8) 次のとおり。

李志梅『報人作家陳景韓及其小説研究』華東師範  
大学2005.4 2005届研究生博士学位論文

[志梅博137-138]这里提及陳景韓翻譯的“日文小説”当是転訳自日文的意大利小説家波倫的作品《新蝶夢》，講述的是一個婚外情的故事。小説連載到故事情節正展開的階段，便突然衝出一條猛狗，將那對背叛朋友和丈夫的偷情男女咬死了，結局很是突然，原來是有這一段曲折。

闕文文『晚清報刊上的翻譯小説』濟南・齊魯書社  
2013.5

[文文141]包天笑『鈞影樓回憶錄統編』より引用して以下の部分について文文は指摘をする。「記得他也曾訳一部日文小説，已訳了大半部，不高興訳了，弄出一條狗來，把書中那個主角咬死了。我駭問何故，他說：“他也不是好人，死了就結束了。”他就是這怪脾氣。」(山西古籍出版社、山西教育出版社1999年版、712頁)。すなわち「上段中包氏提到的陳所翻譯的“一部日文小説”，其  
實就是《新蝶夢》」である。

9) 包天笑『鈞影樓回憶錄統編』香港・大華出版社  
1973.9。目次と奥付は統編。「一九四九年日記」

「後記」を含む。100頁。

同『鈞影樓回憶錄』北京・中国大百科全書出版社  
2009.1。「統編」を含む。「一九四九年日記」

「後記」なし。550頁。

包天笑著、劉幼生点校『鈞影樓回憶錄 鈞影樓回  
憶錄統編』太原・山西出版传媒集团・三晋出版社  
2014.3。「一九四九年日記」「後記」なし。407  
頁

## 清末小説から

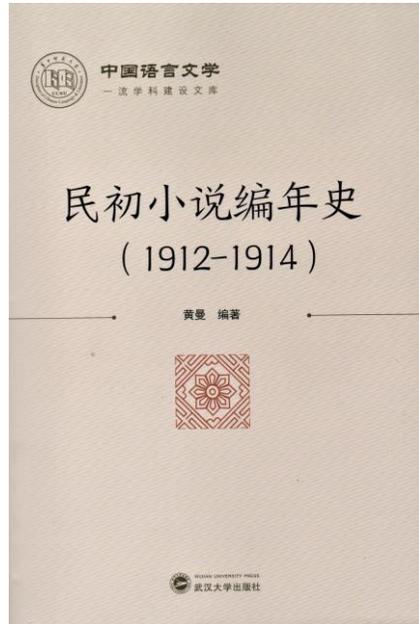
王 桂妹○『文学与啓蒙——《新青年》与新文学研  
究』北京・中国社会科学出版社2010.10

江 曙○清末民初商務印書館の小説生産推广『学

術研究』2021.5.20 (未見)

付 建舟○改良小説社及其作品与晚清社会改良『江  
漢論壇』2018.11.15 (未見)

—— ○商務印書館《說部叢書》在近代中国的伝  
播与接受『浙江師範大学学報(社会科学  
版)』2019年第3期 (未見)



黄曼編著○『民初小説編年史(1912-1914)』武昌・  
武漢大学出版社2021.5

狄 震晨○【書評】撥開“林紓冤案”的迷霧，魯迅輕  
信謠言冤枉林紓了嗎？『文匯報』2019.1.15  
未見

—— ○【書評】作為新文化資源的林紓与嚴復—  
— 讀陸建德《海潮大声起木鐸》『文匯讀書  
周報』2019.11.14 未見

李広益主編○『中国科幻文学大系・晚清卷』全5冊  
重慶大学出版社2020.8

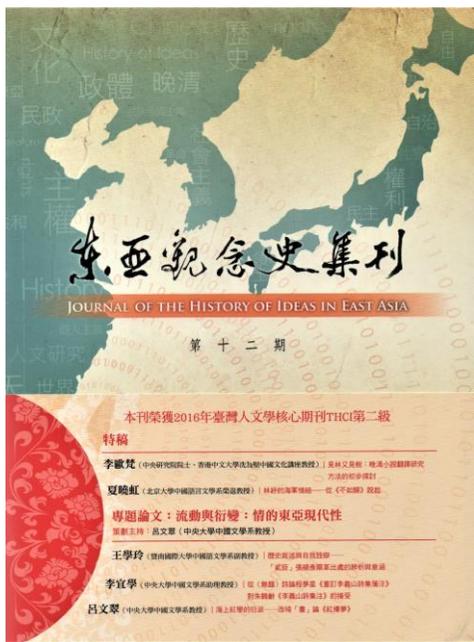
李 広益○(『中国科幻文学大系・晚清卷』) 導言  
李広益主編 重慶大学出版社2020.8

王達敏主編○『中国近代文学論文集・散文卷(1980-  
2017)』蘇州大学出版社2020.9

付建舟、寧倩○《說部叢書》与近代中国知識生産新  
模式『浙江師範大学学報(社会科学版)』  
2020年第5期 2020.9.15 (未見)

孟 兆臣○『中国近代小説研究』上下冊 北  
京・朝華出版社2020.10

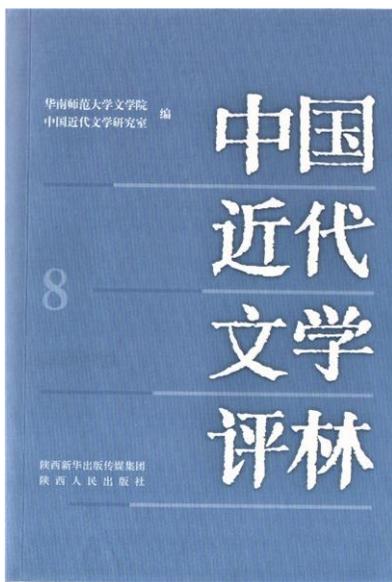
- 孫郁・黃喬生原編、中島長文補正○『周作人著訳篇  
目繫年目録補正』第三版 颯風の会 2015.3.30  
/2021.2.3第三版 電字版
- 陳曉月 ○晚清民初文学翻譯的高峰——百年林紘小  
説研究評述『温州大学学报(社会科学版)』  
2021年4期、34(04) 未見
- 樽本照雄著、周怡青訳○【書評】談談付建舟著《商  
務印書館<說部叢書>叙録》『蘇州教育學  
院学报』第38卷第4期 2021.8 電字版
- 王 祖華○林紘研究的新突破及其啓示『上海翻譯』  
2021年第4期(總第159卷) 2021.8.10 電  
字版
- 賈 立元○『『現代』与『未知』: 晚清科幻小説研究』  
北京大学出版社2021.9
- 段 書曉○「鏡」の名のもとに——清末科学小説か  
ら見る近代中国の創造力『野草』106・107  
合併号 2021.9.30
- 日野杉匡大○【書評】呂輝菲「曼陀『滑稽小説 女  
学生旅行記』における女学生描写——明治  
日本の『滑稽女学生旅行』との比較を中心  
に」『野草』106・107合併号 2021.9.30



『東亞觀念史集刊』第12期2017.6 (2021重印)  
見林又見樹: 晚清小説翻譯研究方法的初步探討  
……李歐梵

- 林紘的海軍情結——從《不如歸》說起 ……夏曉虹  
抒情的技藝: 清末民初的情書翻譯与写作 ……潘少瑜  
從兒女之私到男女戀愛: 五四時期婦女報刊上戀愛問  
題 ……黃錦珠  
西学閱讀与清額復古——清末民初「文藝復興」比附  
下的學術互動 ……宋 雪

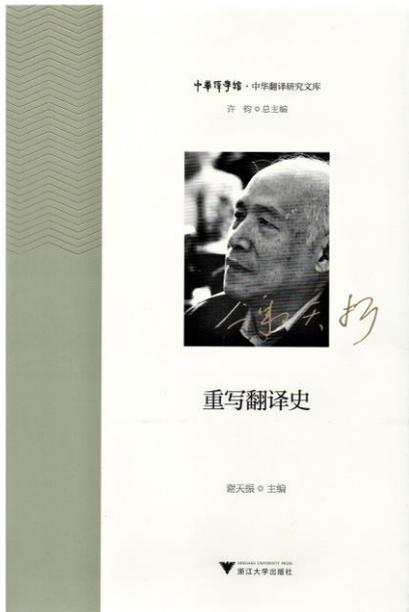
- 『東亞觀念史集刊』第13期2017.12 (2021重印)  
風景的發現与闡釋——晚清畫報中的勝景与民俗  
……陳平原  
《意大利建国三傑伝》化用明治二本政治小説考  
……崔文東  
重述莎士比亞, 重塑「普通讀者」: 《莎士比亞故事集》  
和林紘的《吟邊燕語》(英文) ……孫 宓  
虛無党小説的跨境旅行——關於 *Strange Tales of a  
Nihilist* 英、日、中三個版本的考察 ……詹宜穎



華南師範大學文學院+中國近代文學研究室  
『中國近代文學評林』8輯  
西安·陝西新華出版傳媒集團+陝西人民出版社2021.3  
近百年來黃遵憲研究的回顧与期望 ……管 林  
一個學術史的回顧: 中國近代文學研究的六個階段  
……左鵬軍  
從“春宴唱和”到“庚申修禱”——清道咸間羊城文  
人雅集与群体建構 ……翁筱曼  
文學地理學視野下的晚清海學堂文學教學 ……翁筱曼

梁啓超的學術思想和柏格森的生命哲學 ……陳永標  
 論饒鏗國學方法論意識的自覺 ……閔定慶  
 晚清嶺南文化傳承的自覺與鄉土認知的新變——以《  
 南海百詠》的晚清流播為論述中心 ……翁筱曼  
 甲午戰爭與近代詩風之想變 ……左鵬軍  
 文體記憶與文化記憶的協奏——梁修《花棣百花詩》  
 用典藝術初探 ……閔定慶  
 長歌當哭，悲慨激烈——談廖仲愷的詩詞 ……管林  
 論康白情的舊體詩 ……管林、管華  
 論詩絕句的集成與絕唱——陳融《談嶺南人詩絕句》  
 的批評史和文體史意義 ……左鵬軍  
 中外文化交流與嶺南近代散文風格之嬗變 ……謝飄雲  
 再論文化生態變遷與近代中國散文的新變 ……謝飄雲  
 近代駢文創作特徵論 ……謝飄雲  
 從張園助賑會看《自由談》諸文和新聞的互文與對話  
 ……杜新艷  
 小說與笑話的聯姻：以吳趸人的小說為例 ……杜新艷  
 探索王國維詞學體系的另一個維度——《詞錄》與王  
 國維“為學三變”的文獻學取向 ……閔定慶

重積“信達雅”——論嚴復的翻譯理論 ……王宏志  
 回到嚴復的本意：再積“信達雅”(未完稿) ……謝天振  
 嚴譯術語為何被日語譯名取代? ……廖七一  
 “給予”還是“割讓”?——鴉片戰爭中琦善與義律  
 有關香港談判的翻譯問題 ……王宏志  
 文化交流中“二三流者”的非凡意義——略說林紓小  
 說中的通俗作品 ……陸建德  
 現代翻譯的形成——《新青年》的翻譯 ……趙稀方  
 從後實證主義角度看周瘦鵑翻譯中的創造性叛逆——  
 兼論重寫鴛鴦蝴蝶派翻譯文學史 ……李德超  
 世界語理想與弱勢民族文學譯介與影響 ……宋炳輝  
 抗戰歷史語境與文學翻譯的解讀 ……廖七一  
 翻譯主體的身份和語言問題——以魯迅與梁實秋의 翻  
 譯論爭為中心 ……董炳月  
 現代主義的海外接統——香港《文藝新潮》的翻譯  
 ……趙稀方  
 現代中國視域中的斐多菲·山陀爾——以《格言詩》  
 中譯為闡釋中心 ……宋炳輝  
 上海“孤島”時期文學翻譯的發生——以《西洋文學  
 》雜誌為討論對象 ……熊兵嬌  
 藏在魯迅日記里的翻譯大家——張友松先生的悲劇人  
 生 ……徐伏鋼  
 儒家思想早期在歐洲的傳播 ……張西平  
 歷史的啓示——從中西翻譯史看當前的文化外語問題  
 ……謝天振  
 編後記 ……宋炳輝



謝天振主編『重寫翻譯史』

杭州·浙江大學出版社2021.4

總序 ……許鈞  
 關注翻譯與翻譯研究的本質目標——代序 ……謝天振  
 嚴復的用心 ……王佐良

『明清小説研究』2021年第3期(總第141期)

2021.7.15

清末民初家庭倫理敘事的艱難嬗變——以《一縷麻》  
 的前期傳播與接受為中心 ……楊華麗  
 科技史視域下《淞隱漫錄》女性形象探析  
 ……李忠明、路雅恬、陳萃  
 《杭州白話報》及其小説刊載 ……朱永香  
 晚清《時報》翻譯小説探析 ……余芬霞、余玉  
 南社小説家與清末最後十年小説的轉型  
 ……王雙騰、薛海燕

清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>